

松江市文化財調査報告書 第119集

松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築(改良)工事に伴う
大勝間山城跡発掘調査報告書

2009年1月

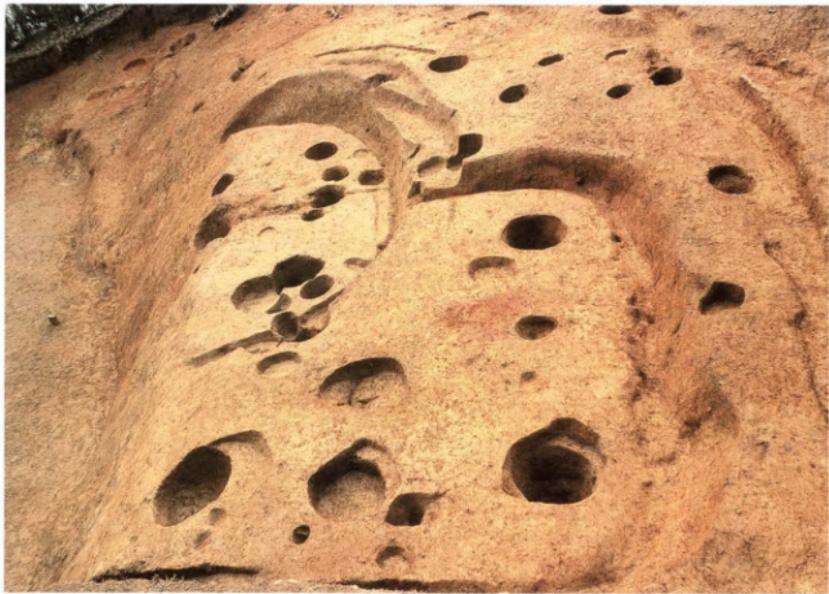
松　江　市　教　育　委　員　会
財団法人　松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第119集

松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築(改良)工事に伴う
大勝間山城跡発掘調査報告書

2009年1月

松　江　市　教　育　委　員　会
財団法人　松江市教育文化振興事業団



C区完掘状況（東より）



豊穴住居跡 SI02 遺物出土状況（部分）



運河佐陀川の揚土層（南南西より）



運河佐陀川の揚土層（西より）

例　　言

1. 本書は、松江市教育委員会、財團法人松江市教育文化振興事業団が平成18、19年度に実施した大勝間山城跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、島根県松江県土整備事務所から依頼を受けて実施したものである。
3. 本発掘調査の現地調査期間は平成18年11月1日～平成18年12月25日、平成19年4月3日～平成19年5月18日、本書の作成期間は平成20年10月1日～平成21年1月31日である。
4. 調査組織は下記のとおりである。

【平成18年度】	主　　体　　者	松江市教育委員会				
	事　　務　　局	松江市教育委員会	教　育　長	福島　律子		
		"	副教育長	川原　良一		
		"　　文化財課	参　　事	岡崎雄二郎		
		"	係　　長	飯塙　康行		
		"	主　　任	後藤　哲男		
	実　　施　　者	財團法人松江市教育文化振興事業団				
			理　事　長	松浦　正敬		
			専務理事	中島　秀夫		
			事務局長	松浦　克司		
		埋蔵文化財課	課　　長	廣江　眞二		
		"	係　　長	瀬古　諒子		
		"	調　査　員	江川　幸子（調査担当者）		
		"	調査補助員	大森　義和		
【平成19年度】	主　　体　　者	松江市教育委員会				
	事　　務　　局	松江市教育委員会	教　育　長	福島　律子		
		"	理　事	友森　勉		
		"　　文化財課	課　　長	吉岡　弘行		
		"	係　　長	飯塙　康行		
		"	主　　任	後藤　哲男		
	実　　施　　者	財團法人松江市教育文化振興事業団				
			理　事　長	松浦　正敬		
			専務理事	中島　秀夫		
			事務局長	松浦　克司		
		埋蔵文化財課	課　　長	廣江　眞二		
		"	課長補佐	錦織　慶樹		
		"	調　査　員	江川　幸子（調査担当者）		
		"	調査補助員	山根　英之		
【平成20年度】	主　　体　　者	松江市教育委員会				

事務局	松江市教育委員会	教育長	福島 律子
"		理事	友森 勉
"	文化財課	課長	吉岡 弘行
"		係長	飯塚 康行
"		主任	後藤 哲男
実施者	財團法人松江市教育文化振興事業団		
		理事長	松浦 正敬
		専務理事	中島 秀夫 (10月15日迄)
		事務局長	松浦 克司
			(10月16日から専務理事事務代行)
	埋蔵文化財課	課長	廣江 真二
	"	課長補佐	錦織 寛樹
	"	調査員	江川 幸子
	"	調査補助員	田中 基次

5. 現地調査においては、島根県教育委員会から調査指導をいただいた。
6. 調査の実施および報告書の作成にあたっては、下記の方々より多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)
 - 西尾克己 (島根県埋蔵文化財調査センター)、柳浦俊一 (島根県埋蔵文化財調査センター)
 - 内田律雄 (島根県埋蔵文化財調査センター)、守岡正司 (島根県埋蔵文化財調査センター)
 - 阿部賛治 (島根県埋蔵文化財調査センター)、松江市立鹿島中学校
7. 現地調査参加者は下記の方々である。 (順不同・敬称略)

【平成18年度】

細田信子、細田勇治、吉岡永子、角田ミヤ子、秦岡富士子、秦岡彬、今村正人、今村邦子
古岡啓三郎、井上幸夫、上田孝子、小川吉子、細木澄子、金森まゆみ、田中和美

【平成19年度】

細田信子、細田勇治、吉岡永子、角田ミヤ子、田中和美、上田孝子、小川吉子、細木澄子

8. 本報告書の作成には下記の者が携わった。
 - (遺物整理) 田中和美、善家幸子、田中富士美、川谷珠美、瀬川恭子、川上敏子、
 - (遺物実測) 善家幸子、田中和美、田中富士美
 - (図面作成) 瀬川恭子、北島和子 (調査補助員)
9. 本書の執筆は、第1章を後藤哲男 (松江市教育委員会)、その他を松江市教育委員会の指導のもとに江川が行い、編集は江川がおこなった。
10. 本書で使用した構造記号は以下のとおりである。
 - SI …豊穴住居跡、SB …掘立柱建物跡、SK …土坑、SD …溝、sd …遺構内の溝
 - SX …性格不明の遺構、P …ピット
11. 発掘調査時に作成した図面、写真および出土遺物は松江市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の記録	4
第1節 調査の経過と方法	6
第2節 弥生時代の遺構と遺物	10
第3節 中世の遺構と遺物	45
第4節 近世の遺構と遺物	48
第4章 結語	50
遺物観察表	32
写真図版	
報告書抄録	



第1図 松江市位置図

挿 図 目 次

第1図	松江市位置図	
第2図	大勝間山城跡位置図	
第3図	開発予定範囲と調査区	1
第4図	大勝間山城跡と周辺の遺跡	3
第5図	大勝間山城と周辺の山城	4
第6図	調査前地形測量図	7
第7図	トレンチA出土遺物実測図	8
第8図	調査成果図	9
第9図	調査区十層断面図	11・12
第10図	豎穴住居跡SI01遺構図	13
第11図	豎穴住居跡SI01遺物出土状況図	14
第12図	豎穴住居跡SI01出土遺物実測図	14
第13図	B区遺構検出状況	15
第14図	B区出土遺物実測図	15
第15図	崖1堀とC区の遺構検出状況	16
第16図	溝SD05遺物出土状況図	17
第17図	溝SD05出土遺物実測図	17
第18図	豎穴住居跡SI02遺構図	18
第19図	豎穴住居跡SI02遺物出土状況図	19
第20図	豎穴住居跡SI02出土遺物実測図（鉄製品）	20
第21図	豎穴住居跡SI02出土遺物実測図（土器）	21
第22図	豎穴住居跡SI03・04遺構図	23
第23図	豎穴住居跡SI03出土遺物実測図	23
第24図	豎穴住居跡SI04遺物出土状況図	24
第25図	豎穴住居跡SI04出土遺物実測図（土器）	25
第26図	豎穴住居跡SI04出土遺物実測図（石器）	26
第27図	掘立柱建物SB01遺構図	27
第28図	溝SD07と採土跡遺構図	28
第29図	溝SD07遺物出土状況図	29
第30図	溝SD07出土遺物実測図（土器）	29
第31図	溝SD07出土遺物実測図（石器）	29
第32図	段SX01周辺の遺構検出状況図	31
第33図	段SX01周辺の遺物出土状況図	31
第34図	段SX01周辺出土遺物実測図（土器）	32
第35図	段SX01周辺出土遺物実測図（石器）	33
第36図	溝SD08・09周辺の遺構検出状況図	34
第37図	溝SD08・09周辺出土遺物実測図（土器）	34

第38図 溝SD08・09周辺出土遺物実測図（石器）	34
第39図 溝SD12遺構図	35
第40図 段SX03周辺の遺構検出状況	36
第41図 加工段01遺構図	37
第42図 加工段01遺物出土状況図	38
第43図 加工段01出土遺物実測図	38
第44図 段SX05と周辺の遺構図	39
第45図 段SX05周辺出土遺物実測図（土器）	39
第46図 段SX05周辺出土遺物実測図（石器）	39
第47図 段SX06出土遺物実測図（土器）	40
第48図 段SX06出土遺物実測図（石器）	40
第49図 段SX07周辺の遺構検出状況図	41
第50図 段SX07以東出土遺物実測図	42
第51図 重機掘削中に出土した遺物実測図	43
第52図 出土地点不明石器実測図	44
第53図 中世遺物実測図	45
第54図 中世遺物の出土状況	46
第55図 火縄銃の弾実測図	47
第56図 佐陀川揚土内出土遺物実測図	48
第57図 佐陀川開削時の揚土範囲	49
第58図 佐陀川揚土置場の推定範囲	52



第2図 大勝間山城跡位置図

図 版 目 次

巻頭カラー1 壺穴住居跡SI02内遺物出土状況

巻頭カラー2 運河佐陀川の揚土網

図版1 (上) 運河佐陀川(左)と大鰐間山城跡調査前風景(南より) (下) 調査前近景(北より)

図版2 (上) 壺穴住居跡SI01畦設定状況(南より) (下) 壺穴住居跡SI01の炭と焼土(西より)

図版3 (上) 壺穴住居跡SI01完掘状況(南西より) (下) 壺穴住居跡SI01と溝SD01完掘状況(北東より)

図版4 (上) 壺穴住居跡SI01の中央ピット(南より) (下) 壺穴住居跡SI01のピットP-2土層断面

図版5 (上) 溝SD01内遺物出土状況(東より) (下) B区完掘状況(北東より)

図版6 (上) C区平面プラン検出状況(西より) (下) 壺穴住居跡SI02畦設定状況(西より)

図版7 (上) 壺穴住居跡SI02遺物出土状況(東より) (下) 壺穴住居跡SI02西壁付近遺物出土状況(東より)

図版8 (上) 壺穴住居跡SI02北壁付近遺物出土状況(北より) (下) 壺穴住居跡SI02遺物出土状況(北壁付近北)

図版9 (上) 壺穴住居跡SI02平面プラン検出状況(北東より) (下) 壺穴住居跡SI02完掘状況(東より)

図版10 (上) 壺穴住居跡SI03と04の鞋セクション(南西より) (下) 壺穴住居跡SI04平面プラン検出状況(西より)

図版11 (上) 壺穴住居跡SI04中央ピット内敲石出土状況(西より) (下) 壺穴住居跡SI04完掘状況(東より)

図版12 (上) 壺穴住居跡SI04完掘状況(北より) (下) 壺穴住居跡SI02、03、04完掘状況(東より)

図版13 (上) 壺穴住居跡SI02、03、04完掘状況(西より) (下) 壺穴住居跡SI02、03、04の切合(東より)

図版14 (上) 溝SD07検出状況(東より) (下) 溝SD12完掘状況(南より)

図版15 (上) D区中央畦(南西より) (下) 段SX01とその南の造構(東より)

図版16 (上) 段SX01の下方床面で出土した土器窓 (下) 溝SD08、09とその南の造構(東より)

図版17 (上) 加工段01平面プラン検出状況(東より) (下) 加工段01の西隅遺物出土状況(南東より)

図版18 (上) 加工段01の北辺遺物出土状況(東より) (下) 加工段01完掘状況(南東より)

図版19 (上) 落ち込みSX06と畦(南より) (下) 段SX04以南の造構完掘状況(北西より)

図版20 (上) D区完掘状況(北東より) (下) 弥生時代の造構面完掘状況(南東より)

図版21 (上) A区の土師質土器、皿破片出土状況 (下) 火縄銃の弾丸出土状況(西より)

図版22 (上) 佐陀川開削に伴う地山加工の跡(北東より) (下) 佐陀川開削に伴う地山加工の跡(南西より)

図版23 (上) 佐陀川開削時の掲上(A-A'ライン) (下) 佐陀川開削時の掲土(A-A'ライン)

図版24 (上) セクション⑧-⑨全景(南西より) (下) セクション⑧-⑨前景(南南西より)

図版25 (上) 佐陀川揚土網の剥ぎ取り風景 (下) 調査完了後前景(南より)

図版26 (上) 一般の人を対象とした現地説明会風景 (下) 鹿島中学校生徒を対象とした遺跡説明会風景

図版27 出土遺物

図版28 出土遺物

図版29 出土遺物

図版30 出土遺物

図版31 出土遺物

図版32 出土遺物

図版33 出土遺物

第1章 調査に至る経緯

松江鹿島美保関線は松江市袖師町地内的一般国道9号交差点を起点とし、島根半島の日本海沿岸を東西に結び地域住民の生活に欠くことのできない基幹道路として重要な役割を担っている。

このうち鹿島町の佐陀川に沿った区間においては幅員狭小に加え、従来から冠水による通行規制などを余儀なくされ、通勤・通学等に大きな支障をきたしていた。

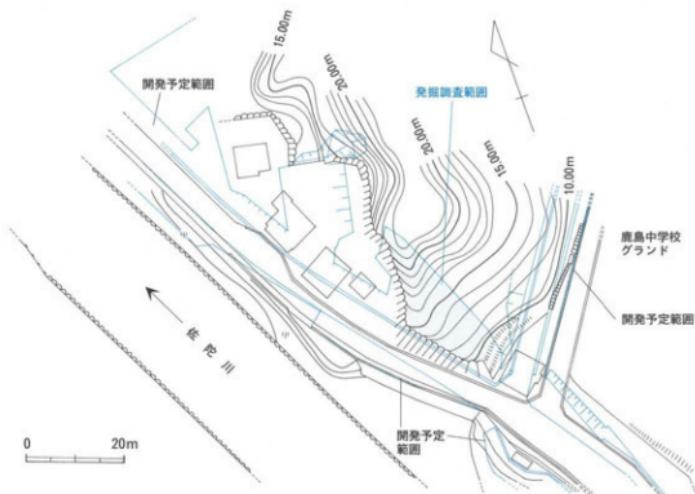
のことから島根県では平成13年度に計画延長1.9kmを佐陀本郷工区として事業着手した。

平成17年度、島根県松江土木建築事務所（現、島根県松江県土整備事務所）から松江市教育委員会文化財課に対して協議が行われた。

松江市文化財課では計画道路上及び近隣に周知の遺跡である名分丸山古墳群、一軒屋上古墳、大勝間山城跡が存在することを回答し、遺跡保護のため島根県松江土木建築事務所と協議を重ねた。

結果、名分丸山古墳群については墳裾を外しての設計、一軒屋上古墳については墳裾が近接していることから試掘調査を実施し、墳裾が広がらないことを確認した。

のことにより、名分丸山古墳群と一軒屋上古墳については遺跡の保護がなされたが、大勝間山城跡については計画変更が困難との結論に達し、発掘調査を実施することとなった。



第3図 開発予定範囲と調査区

第2章 位置と環境

大勝間山城跡（1）は、宍道湖北方に位置する島根半島の講武盆地西端にある。調査区は大勝間山南西端の530m²で、所在地は松江市鹿島町名分656-5、1533-8、1534-3である。

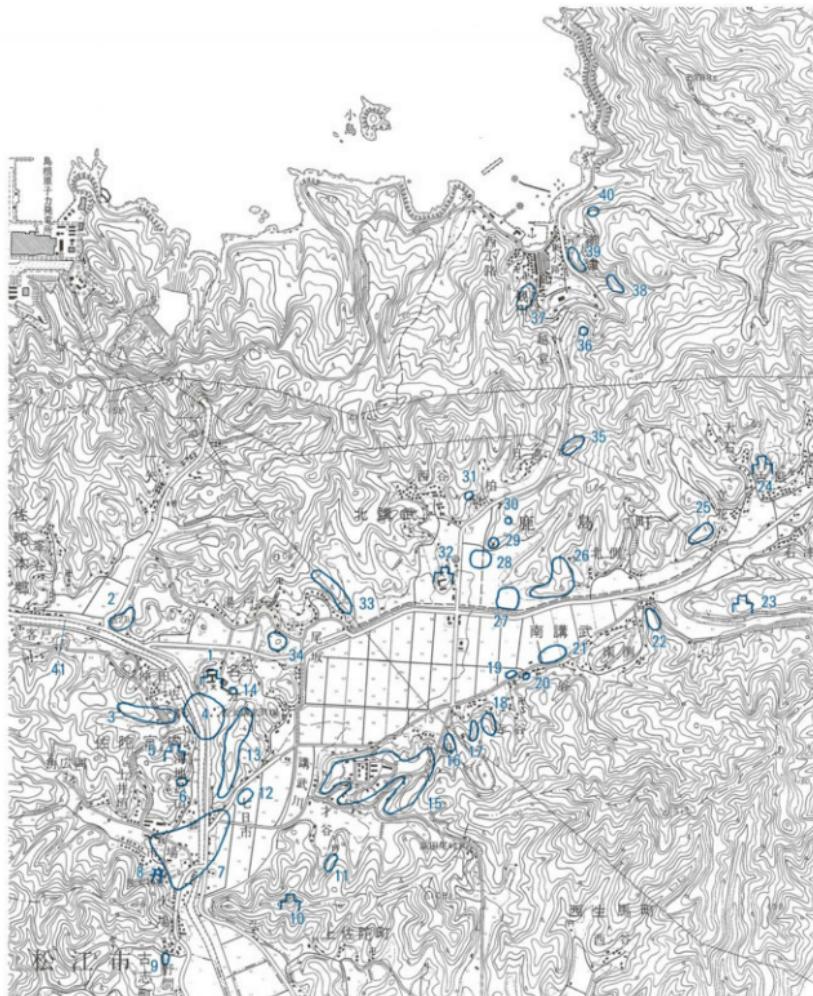
大勝間山は一見独立丘陵の様相を呈しているが、かつては鶴灘山と低い尾根で繋がっていたという説もある。しかし、戦後の大规模な農地開発や鹿島中学校の建設等で大きく削平を受けて地形が変貌し、山城が機能していた時代の地形は大半が消滅してしまった。ただ、現在残っている周辺の地形を観察すると、仮に大勝間山と鶴灘山が繋がっていたとしても、大勝間山はほぼ独立丘陵に近い状況であったと思われる。

大勝間山が立地する講武盆地は、講武川が造り出した沖積平野で180haと広く、現在は主に水田地帯として利用されている。古代、中世においては条里制が敷かれていたことでも知られている。いにしえの風景は、奈良時代に編纂された『出雲國風上記』が参考になる。それには、「佐太河。源は二つ。東の水の源は、島根の郡の所謂多久川、是也。西の水の源は秋鹿の郡渡の村より出づ。二つの水合いて、南に流れて佐太の水海に入る。即ち水海の周り七里。鮎有り。水海は入海に通る。潮の長さ一百五十歩、広さ二十歩。」「惠曇の陂。周り六里。鷺鳥・鷹・鶴・鮎在り。四の辺に草・桜・菅生ふ。養老元年より以往は、荷渠、自然に叢がり生ひて太だかりき。二年より以降、自然に亡失せて、都べて一茎無し。俗人云はく、其の底に陶器・龜・鱗等の類多く有り。古より時々人溺れ死ぬ。深き浅きを知らず。」と記されている。大勝間山南方の佐太水海や西方の恵曇陂は、時代によって規模や形状を変化させながら、後述する佐陀運河が開削されるまで存在してきたであろう。大勝間山から低地を西に向かえば恵曇陂を経て日本海の恵曇港に至り、講武盆地の中央を北に山越えすれば日本海の御津港に至る。講武川を南に下れば佐太水海を経て宍道湖へ至ることができ、大勝間山はまさに交通の要衝地ともいえる。また、海や川、湖沼、山の幸に恵まれ、原始稲作に都合の良い低湿地も広がっており、講武盆地周辺は古くから生活しやすい場所であったと思われる。

講武盆地はこのような地勢であるから、平地とその縁辺丘陵には実に多くの遺跡が分布している。以下で時代ごとに周辺遺跡の概要を紹介する。

・縄文時代 非常に有名な遺跡として、1933年に国指定史跡となった佐太講武貝塚（4）がある。前期に形成された貝塚で、貝は汽水性のヤマトシジミを中心とする。佐太水海や恵曇陂の前身の湖で漁労をおこなっていたのである。遺物包含層からは縄文時代中～晚期の土器も出土している。佐太前遺跡（7）では幅2m前後の自然河川の埋土中から縄文時代後～晚期初頭の土器片が出土しており、自然河川周辺またはその上流に縄文時代後～晚期初頭の遺跡が存在していると思われる。堀部第1遺跡（27）では遺物包含層から縄文後期～晚期の土器が多量に出土しているほか、北講武氏元遺跡（28）では縄文時代晚期の突帯文土器と弥生時代前期の土器が同一土層から出土しており、縄文時代から弥生時代へ移行する時期の遺跡として注目されている。

・弥生時代 北講武氏元遺跡から遠賀川式土器が出土して、住居跡と推察されている。その近くの堀部第1遺跡では遠賀川式土器を伴う標石墓が63基検出され、墓壙内に木棺が残存するものも見つかった。島根県東部における弥生時代前期の集団墓地として貴重な遺跡である。古浦砂丘遺跡（地図外）は、海浜部の砂丘に位置する前～中期の集団墓地で、頭蓋骨の額に青銅の線錆がついた人骨はシャーマンを連想させて興味深い。佐太前遺跡では前期から幅広い時期の大量の土器が出土しており、この地域の拠点集落の一つであったことが知られている。中期では、朝日山北方の中腹にある志谷奥遺跡



第4図 大勝間山城跡と周辺の遺跡

1. 大勝間山城跡
2. 名分丸山古墳群
3. 免田古墳群
4. 佐太講武貝塚
5. 芦山城跡
6. 清水遺跡
7. 佐太前遺跡
8. 佐太神社
9. 戸崎遺跡
10. 海老之城跡
11. 嶺創横穴墓群
12. 名分塚田遺跡
13. 鶴瀬山古墳群
14. 鶴瀬山遺跡
15. 奥才古墳群
16. 南講武大日遺跡
17. 清水の奥横穴墓群
18. 中尾谷山古墳群
19. 南講武小劍第2遺跡
20. 南講武小劍遺跡
21. 南講武草田遺跡
22. 多久神社裏古墳群
23. 松尾山城跡
24. 大石山城跡
25. 岩鼻古墳群
26. 堀部古墳群
27. 堀部第1遺跡
28. 北講武氏元遺跡
29. 雄ヶ崎荒神古墳
30. 向山古墳
31. 北講武岩屋古墳
32. 小田山城跡
33. 尾坂古墳群
34. 藤山古墳・藤山遺跡
35. 恵谷横穴墓群
36. の松古墳
37. 秋葉山古墳群
38. 御津貝塚横穴墓群
39. 御津茶畠横穴墓群
40. 御津中の津古墳
41. 運河佐陀川

(地図外)から銅鐸2個、銅剣6本が出土したほか、鶴灘山遺跡(14)や名分塚田遺跡(12)で住跡や遺物包含層が報告されている。後期では、四隅突出型埴丘墓の可能性がある南講武小廻遺跡(20)が知られているほか、南講武草田遺跡(21)からは在地系の土器に混じって大量の畿内系搬入土器が出土しており、地域間交流の活性化を示すものとして注目されている。

・古墳時代 奥才古墳群(15)は大小50余基から構成される大古墳群で、前期から後期を通じての古墳築造が確認されている。九州北部や丹後半島に類例が見られる、小蹠敷の長い木棺を内部主体を持つ古墳のほか、鏡や玉類、石剣など豪華な副葬品を持つ有力者の古墳が存在する。水田を挟んで西側に位置する鶴灘山古墳群(13)は未調査であるが、群構成は奥才古墳群に近似し、柄鏡型の前方後円



第5図 大勝間山城と周辺の山城 (1/200000)

1. 大勝間山城跡
2. 池平山城跡
3. 芦山城跡
4. 伊貝城跡
5. 海老山城跡
6. 高柳城跡
7. 満願寺城跡
8. 荒隈城跡
9. 荒隈城支城跡
10. 白鹿城跡
11. 真山城跡
12. 上講武殿山城跡
13. 松尾山城跡
14. 大石山城跡
15. 小田山城跡
16. 佐太神社

墳も存在することより、前期から築かれた古墳群と考えられている。そのほか、堀部1号墳（26）は全長70mを超える前方後円墳の可能性があり、今後の確認調査が待たれる。後期では、石棺式石室を主体部に持つ講武岩屋古墳（31）や横穴式石室を有していたという向山古墳（30）のほか、多数の古墳や横穴墓が分布している。講武盆地の安定した生産力や海上交通を利用した交流を背景として、古墳時代を通じて繁栄していたことがうかがえる。

・歴史時代 『山雲国風土記』によれば、奈良時代には大勝間山の西方は秋鹿郡、講武盆地は島根郡に含まれていたようである。奈良・平安期の遺物が出土する遺跡は、北講武氏元遺跡や古油砂丘遺跡、清水遺跡（6）、戸崎遺跡（9）など多数存在するが、遺物の出土量自体は多くない。

平安時代末期から中世にかけては『山雲国風土記』に「佐太御子社」と記された佐太神社（第5図16）が山雲国二宮として大きな勢力を誇っている。一方、平安時代末期に佐太神社周辺は安楽寺院に寄進されて佐陀荘が成立し、鎌倉時代初期に朝山氏が莊園下司職に補任された。朝山氏はその後、佐太神社の宮司を兼ねることになるが、これ以降の出来事については、興味深い文献資料が多く残されているので、以下ではそれらの主な部分を紹介する。

①「池平山城（2）は慶永六年に朝山昌時が築城した」『朝山家系圖』（『八束郡誌』）

②「池平山城の城主、朝山越前守貞昌が寛徳二年に芦山城（3）を築城し居城した。貞昌の子利綱は永正十一年に安芸守となり、以降尼子氏に隸属した。綱忠のとき、恵美山（海老山）（5）の新田右馬頭某が佐陀神領の横領を企てたので、永正十七年五月二十日に恵美山を攻撃した。」「朝山家系圖」（『八束郡誌』）

③「仁田（新田）氏滅亡後尼子氏から地頭職を与えられたのは福頼内膳正であった。彼は大勝間山城に移った」『雲陽誌』『朝山家系圖』（『八束郡誌』）

④「…然ば佐陀に程近き勝間城には、志道左馬介、中村藏太夫を毛利より、被置けるを攻めん逆、三刀屋藏人八百余騎を添て彼向、合戦手繫く敵方共に亡命を不顧切戦けるに、一刀屋藏人運の極にや、鉄砲に脇腹を討ち抜かれ死せにければ、勝久公無念之憤無止時、追々軍兵を差向、勝間を攻落とさんとし玉ふ山間へければ、元春より森脇岩狭守、益田越中守五百余騎を添て加勢被致けるに、途中にて森脇市正、平野嘉兵衛、真木與三衛門等に出手、追つ返しつ戦いけり、然るに毛利勢は過半は手負、死人はまた二三十人出来ければ、不叶して引退くを跡より附入追討にしける故、這々と躰が巣へぞ人にけり…」『雲陽軍実記』

以上、①～④は文献という二次資料であるから全てを鵜呑みにすることは大変危険である。特に④は尼子復興戦の時の様子で、尼子氏側の家臣が書いた軍記物であるから信憑性は特に低い。しかし、大勝間山城は尼子勢が立て籠もる真山城の向城でもあり、当時注目されていた場所であったと理解したい。①～④より、大勝間山城が位置する場所の中世の情勢、雰囲気を感じ取ってもらえたと思う。

近世に入り江戸幕府の治世になると、松江藩の中心地は現在の市街地と同じ標高の低い場所に移された。大雨が降ると出雲諸川から濁流が宍道湖に流れ込み、大橋川だけでは排水が追いつかず、城下町はもとより宍道湖縁の田畠や穀倉出雲平野にも被害を及ぼしていた。宍道湖の排水問題を解決しようと尽力したのが、松江藩士清原太兵衛である。彼は宍道湖北岸の佐太の入海と日本海側の恵雲を結ぶ、全長12km、幅25mの運河開削を計画し、天明5年（1784年）に工事を開始し、難工事を経て天明8年（1787年）には完成させた。現在の佐陀川がこれである。以米水害は減少し、新田開発が盛んとなり、運河を通じての物流も盛んとなって惠雲港は大いに賑わったとのことである。

*参考文献 『佐太講式日塚発掘調査報告書』島根県鹿島町教育委員会 1993年 ほか多数

第3章 調査の記録

第1節 調査の経過と方法

調査区は南北57m、東西最大幅15mの不整形な形状で、調査面積は530m²を測る。西からA区、B区、崖1、C区、崖2、D区と称する（第6図）。

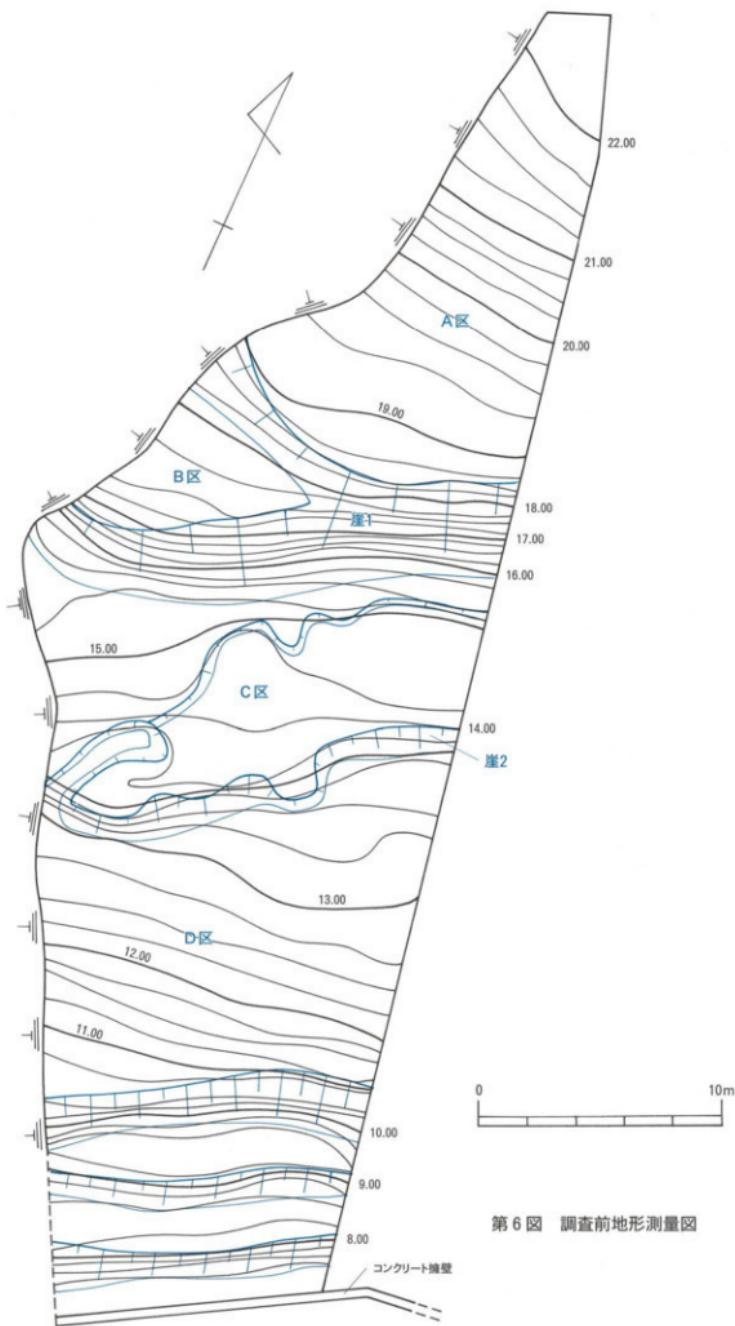
地形的にはA区北端が標高21.5mと最も高く、南方に向かって低くなりD区南端の標高は8m、北端と南端の高低差は13.5mを測る。A、B、C区に狭い平坦地があるが、A区西方や崖1、2、D区といった大半は傾斜地で占められている。中世の山城跡という遺跡の性格上、比高約3mを測る崖1、比高約1mを測る崖2は切岸造構の可能性が高いと考えられた。現況は雜木林と竹林であったが、C区にはカブト虫の幼虫が大量に生息するふかふかの土が無造作に置かれており、その土を除去すると朽ちた切株が多数埋もれていた。荒れ果てていたが近年まで人の手が入っていたようである。また、D区の裾部分にも土砂崩落防止対策と思われる切上が3段の階段状に造られており、地形はかなり改変されている可能性が高いと推察された。調査区西側は現在の県道松江庵島美保関線で切られており、オーバーハングした地山むきだしの崖となっていた。

調査範囲は急勾配の斜面が多いため、当初は山城の調査方法として、崖1や崖2、D区の斜面にトレントを必要本数据てて曲輪や切岸の構築状況を観察し、A、B、C区の半坦面のみ全面発掘調査を実施して造構検査に努めるという工程をとる予定であった。調査期間は2ヶ月間である。2ヶ月間といつても山陰地方の11、12月、特に12月は天候が荒れる日が多いため、11月中に大半を終了させておく必要があった。

そこで、作業員を通常の2倍に近い15人雇用し、より詳細な調査計画をたてるために調査区全体を貫くトレントAを設定し（第8図）、まずその掘り下げをおこなった。D区下方から1m間隔で作業員を配置して掘削を始めたが、D区については掘っても掘っても軟らかい客土の層が続き、ついには作業員の頭も見えない状況となった。トレント内で掘り下げる班と、上から紐のついたバケツを渡して廃土捨てをおこなう班、そして廃土を場外に運び出す班に分かれ、約5日間を要してトレントAはやっと掘りあがった。

トレントAの土層を観察したところ（第9図Ⓐ～Ⓐ'）、D区の表土下には黒色粘質土の湿地泥層と黄褐色の山土層が複雑に厚く積み上げられた状況が確認された。このような土層は、本調査区から約150m東南にあるバクチ谷のトレント調査¹¹でも確認されており、そこでは泥土中から繩文土器が出土したことより、江戸時代の運河佐陀川開削工事の際に佐太満武呂塚付近の泥土が捨てられたものと解釈されていた。このことにより本調査区でも佐陀川の揚土置場が存在したことがわかったのである。D区以外の堆積土は浅く、山城の曲輪に関連する人為的な上層は確認できなかったが、A区半坦面の表土直下からは上師皿が出土した。また、調査区全面において弥生時代の遺物が出土し（第7図）、地山に刻まれた造構も確認した。もちろん、D区の運河佐陀川揚土層の下も例外ではなかった。

調査区は三時代の造構が存在する複合遺跡であることが判明した。廃土は全て場外に運び出さなくてはならない上、傾斜地530m全面に弥生時代の造構が存在しているとなると、残された期間で調査を終了することはまず不可能である。そこで松江市教育委員会と協議し、平成18年度はA区からC区



第6図 調査前地形測量図

までの調査を実施し、崖2とD区については平成19年4～5月の2ヶ月間で調査をおこなうこととし、依頼者と協議決定した。

以上のような経緯の後、平成18年度の調査に入った。

トレントAから10m西方に畦⑧--⑨'を設定して上層観察に備え（第8図）、A区西方から順次掘り下げをおこなった。また、1辺5mのグリッドを設定し、遺物包含層から出土した遺物はグリッド単位で取り上げをおこなうこととした。

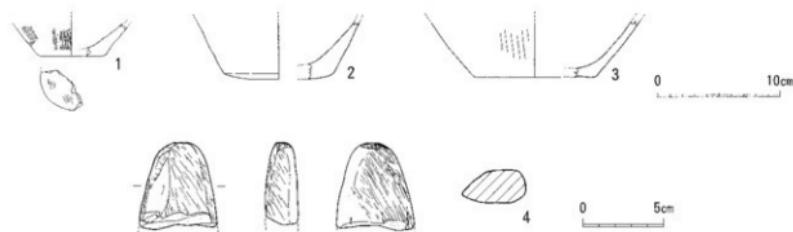
A～B区は地山が浅いため木の根に悩まされたが、A区では土師皿破片の散乱を確認したほか堅穴住居跡1棟と多数のピットを検出し、B区では溝1条と若干のピットを検出した。崖1の直下では溝4条を検出し、C区では堅穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟のほか多数のピットを検出した。寒風吹きさくふ中、C区の堅穴住居跡内で出土した非常にもらい土器群の検出作業には5時間費やし、カメラを構えると撮影対象の上に無数の枯葉が舞い落ちるといった出来事も多々あったが、比較的穏やかな天候に恵まれて調査は順調に進めることができた。しかし、廃土の場外運び出しのための重機が地山覆土の厚いD区までしか導入できず、そこまで人力で廃土を運ぶという作業にはかなりの労働力を削かねばならなかった。

人力による発掘調査と並行して、重機による運河佐陀川の揚土除去もおこない、来年度調査のために弥生土器包含層直上まで掘り下げた。揚土の中に遺物が混じっていないか常に注意をはらっていたが、見つかったものはわずか4点であった。

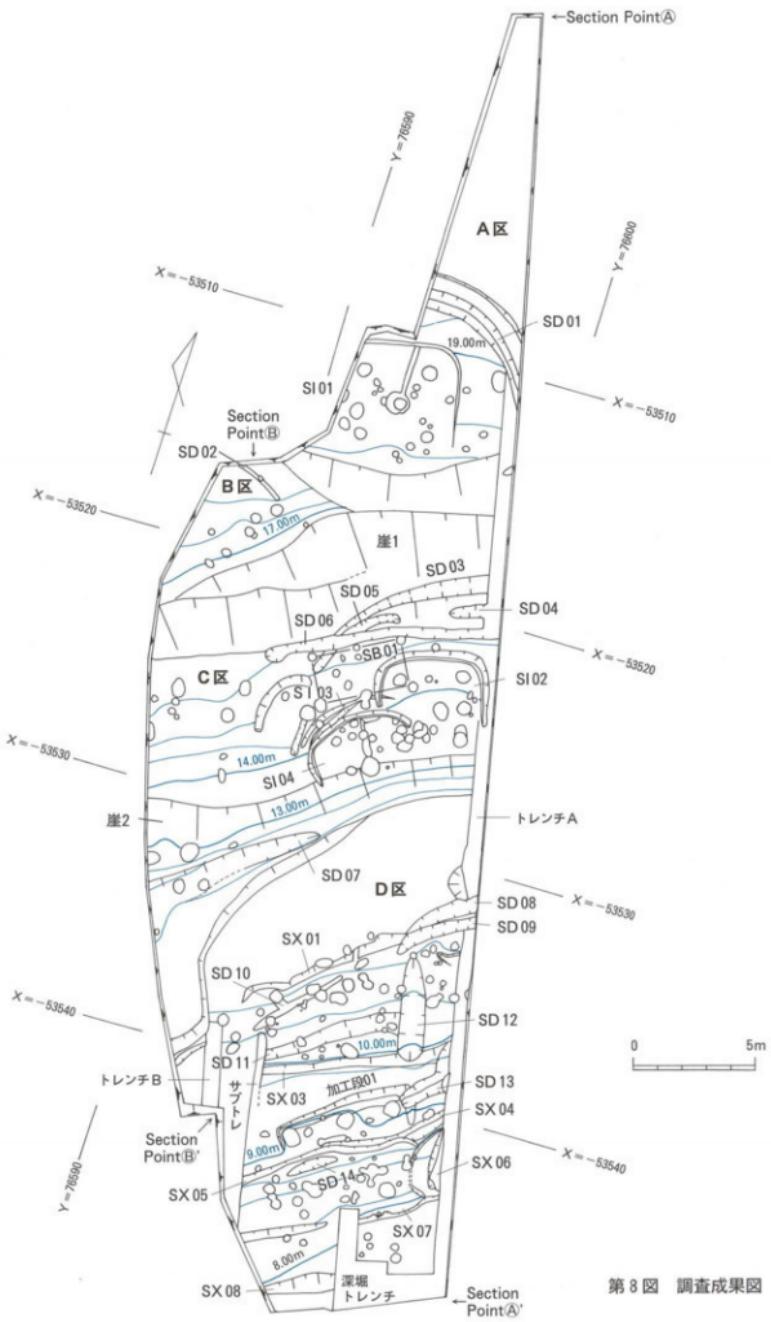
調査の記録方法は、土師皿については主に腐葉土直下から出土して移動しやすい状態であったため、出土範囲のみを図面化したが、その他の遺構に伴った遺物は縮尺1/10で図面をとり、写真撮影をおこなった。堅穴住居跡の調査には極力十字状の畦を設定し、溝状遺構には畦を設定し、ピットは基本的に全て半裁をおこなって縮尺1/20で埋土の図面をとり、写真撮影をおこなった。完掘後には遺構を全て縮尺1/20で図面にとって標高を記入し、写真撮影をおこなった。最後に、平板を利用して縮尺1/100の遺構配置図を作成して平成18年度の調査を終了した。

平成19年度調査も調査期間は2ヶ月間であったが、4、5月の非常に気候の良い時期であった。重機による廃土処理が可能ため、作業員の数を8人に減らして調査に入った。

調査方法は、標高が高い崖2から徐々にD区下方へ遺構の平面プラン検出をおこなった。それと並行して、Bラインの土層堆積状況を縮尺1/20で図面にとり、写真を撮影した後に畦の撤去をおこなった。D区では、加工段を作らる掘立柱建物跡1棟を除いては、どこまでが1つの単位か判然としない段



第7図 トレントA出土遺物実測図



第8図 調査成果図

や溝、ピットを多数検出した。しかし、時間上の制約があったため、中央に南北方向の土層観察用畦1本設定して後日の検討に備えることとし、とにかく掘り進めることにした。

調査の記録方法は、ピットは基本的に全て半歳をおこなって縮尺1/20で埋土の図面をとり、写真撮影をおこなった。段や溝状造構は中央畦で上層を観察したほか、必要に応じて別途畦を設定して縮尺1/20で図面をとり、写真撮影をおこなった。遺物出土状況は縮尺1/10で図面をとり、写真撮影をおこない、最後に、平板を利用して縮尺1/100の造構配置図を作成した。また、運河佐陀川の揚土層を資料として残すため、土層の剥ぎ取りも実施した。

平成19年5月26日に一般市民を対象とした現地説明会を開催し、翌5月27日には松江市立鹿島中学校から依頼を受けて、生徒を対象とした現地と遺物の説明会を3回に分けておこなって調査の全工程を終了した。

注(1)『佐太講武其塚発掘調査報告書』島根県鹿島町教育委員会 1993年

第2節 弥生時代の造構と遺物

調査区は南面する傾斜地で、店舗に適した場所である。検出した造構は集落を形成する建物跡とその付帯施設と思われ、A区西端の山頂部を除いた調査区全面で造構を検出した。

具体的には竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟、加工段を伴う掘立柱建物跡1棟、溝14条、段状造構5ヶ所、ピット多数である。ただし、D区西端部では運河佐陀川開削工事の際に最深部で約1mが削り取られてフラット面が造られたため、竪穴住居跡2棟については約半分が失われ、南北幅6m、東西幅13mの範囲については造構面が失われていた。

周囲の地形から見ると、弥生時代の造構はA、C、D区では東側の調査区外に、B区では西側の調査区外に広がっている可能性が高い。遺物包含層から出土した土器を観察すると、最も古い土器は松本編年⁽¹⁾のIV-2様式、最も新しい土器はV-4様式であった。

以下、調査区ごとに詳細を記す。

(1) A区

竪穴住居跡1棟と、その山手に弧状に掘られた溝を検出した。

①竪穴住居跡SI01

(造構)

隅丸方形の竪穴住居跡である（第10図）。

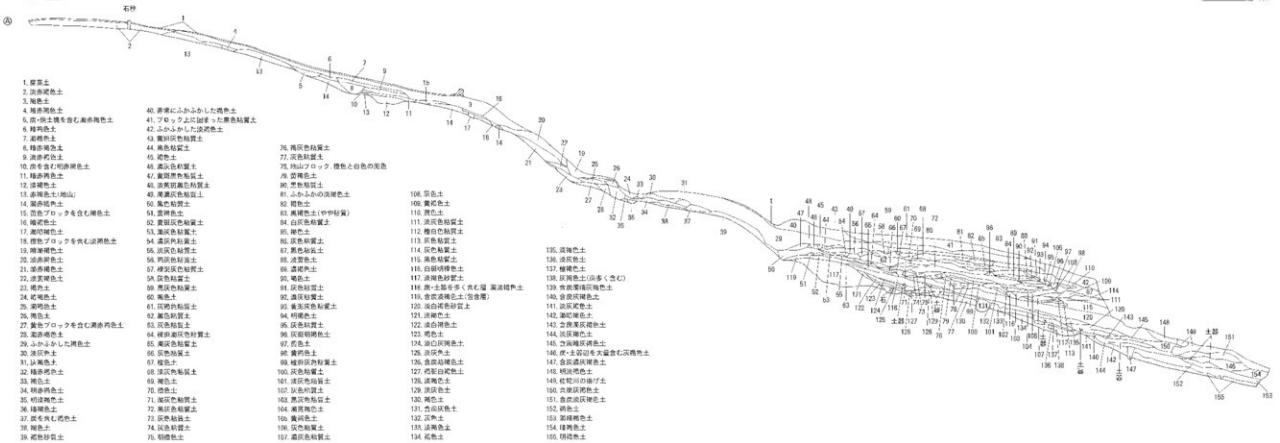
西壁は調査範囲外にあって検出することができず、東壁は造構面が流失しており、この竪穴住居跡の平面法量を実測することはできなかった。しかし、4ヶ所の主柱跡と壁帶溝や壁との距離関係から、床面の下端法量は東西5.2m×南北5.2mと復原できた。

床面の深さは北壁で45cm、標高は18.60mを測る。

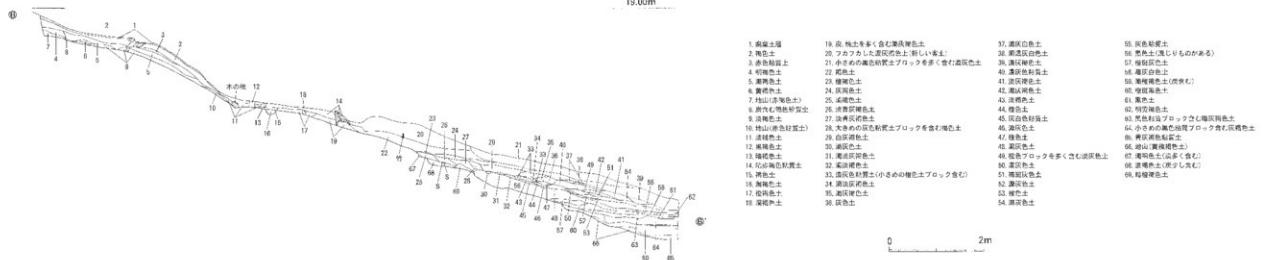
床面の縁には壁帶溝が巡らされていたと思われるが、東辺の溝は南方ほど狭く浅くなつてついには消失し、南辺は完全に消失していた。最も残存状況が良かった北辺で観察すると、壁帶溝は幅20cm、深さ6cm前後を測り、埋土は濁明橙褐色土であった。

4ヶ所の主柱跡の心々距離はP-1とP-2で2.8m、P-4とP-3で2.7m、P-1とP-4で2.6m、P-2とP-3で2.7mを測り、主柱の中心から排水溝の内側上端までの距離はP-1で1.07

23.00m



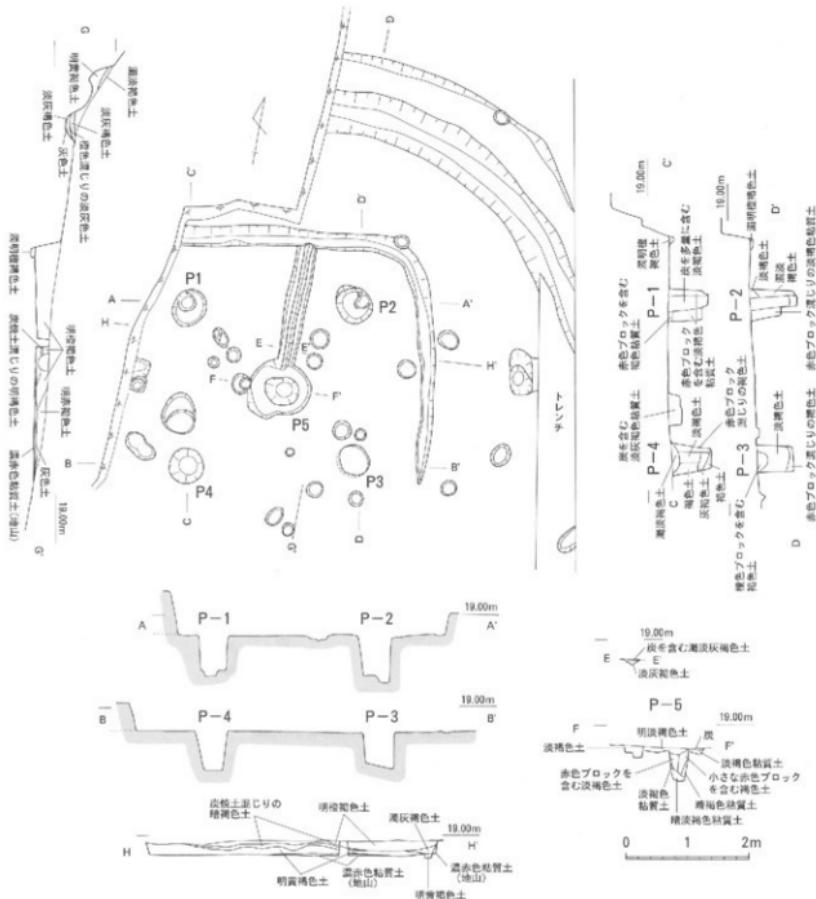
19.00m



第9図 調査区土壌断面図

m、P-2で北へ1.0m、東へ1.07m、P-3で1.07mを測る。主柱跡はいずれも上端直径が50~60cm、下端直径40~46cm、深さは55~70cmと直徑が大きくて深いしっかりしたものであった。上層断面を観察するとP-1・2・4では木柱の痕跡が明瞭に残っており、直徑20cm前後の丸太材が使用されていたことがわかった。

中央ピットP-5は4主柱のほぼ中央に位置し、2段構造になっていた。1段目は上端直径1m前後を測る不整形な円形で、底面は凹凸が目立つ深さ5~10cm程度の浅いものである。2段目は1段目のほぼ中央に穿たれた円形の深い掘り込みで、上端直徑45~55cm、下端直徑25cm、床面からの深さは55cmを測る。深さは4主柱穴とほぼ同じ深さであるが、直徑はやや小さい。埋土を観察すると、1段



第10図 堪穴住居跡SI01遺構図

目の浅い掘り込みの一部には炭層があり、2段目の最深部に暗淡褐色粘質土層があったほかは、故意に埋め戻されたような地山ブロックを多く含む土であった。

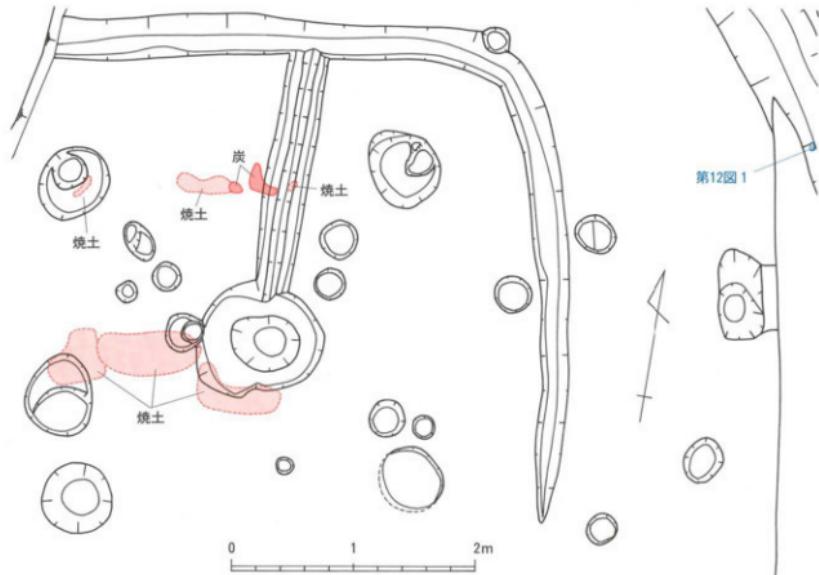
中央ピットP-5の北端から北辺の壁帶溝に向けて1条の溝が掘られていた。この溝の上端幅は40cm前後で、断面を見ると下端左右に幅4cm前後のテラスがあり、中央にはさらに深さ5cmのV字状の溝が掘られていた。中央ピットP-5の周囲にも浅いテラス状のフラット面が存在したことから、溝と中央ピットP-5は蓋をされることがあったのかもしれない。

(焼土)

焼土は主にP-1とP-2の中間あたりから中央ピットP-5にかけて集中していた(第11図)。火を焚く場所は微妙に移動しているが、おおよそ決まっていたようである。

(遺物)

竪穴住居跡SI01の埋土中から微細な土器片は何点か出土したが、器種が判別できたものは小壺の破片(第12図2)だけである。この小片で時期を確定することは困難と考える。



第11図 竪穴住居跡 SI01 遺物出土状況図



第12図 竪穴住居跡 SI01 出土遺物実測図

②溝SD01

SI01の山手側の傾斜地には、平面的に見ると弧状に掘られた溝SD01があり、その北側にはテラスが設けられている。テラスは傾斜地を約40cm掘り下げて幅40~55cmの平坦面を造りだしたもので、溝SD01はテラスから約25cm掘り下げた、断面U字状の溝である。発掘調査で確認できたのはその内の一端にすぎず、テラスの意味は不明であるが、弧状の溝は雨水が直接堅穴住居内に流れ込むことを防ぐための施設であろう。

(遺物)

溝SD01の底部から、口径20.1cm(推)、頸径16.3cm(推)を測る甕の破片1点(第11図、第12図)が出土した。弥生時代後期末かそれ以降の甕と思われる。溝SD01は堅穴住居跡SI01の付帯施設であるから、これをもって堅穴住居跡SI01の時期と考えたい。

(2) B区

(遺構)

B区ではピット9ヶ所と溝1条を検出した(第13図)。

ピットは直径が小さくて浅いものがほとんどで、建物を構成するような配列は見られなかった。溝SD02は断面U字状、深さ20cm弱を測り、北西の調査区外へと続いている。埋土は炭を含む淡褐色土である。遺構面は調査区外の北西に続いている。

(遺物)

遺構面から浮いた状態で少量の土器が出土した。第14図1は口縁端部のフラット面に連続×文様が



第13図 B区遺構検出状況



第14図 B区出土遺物実測図

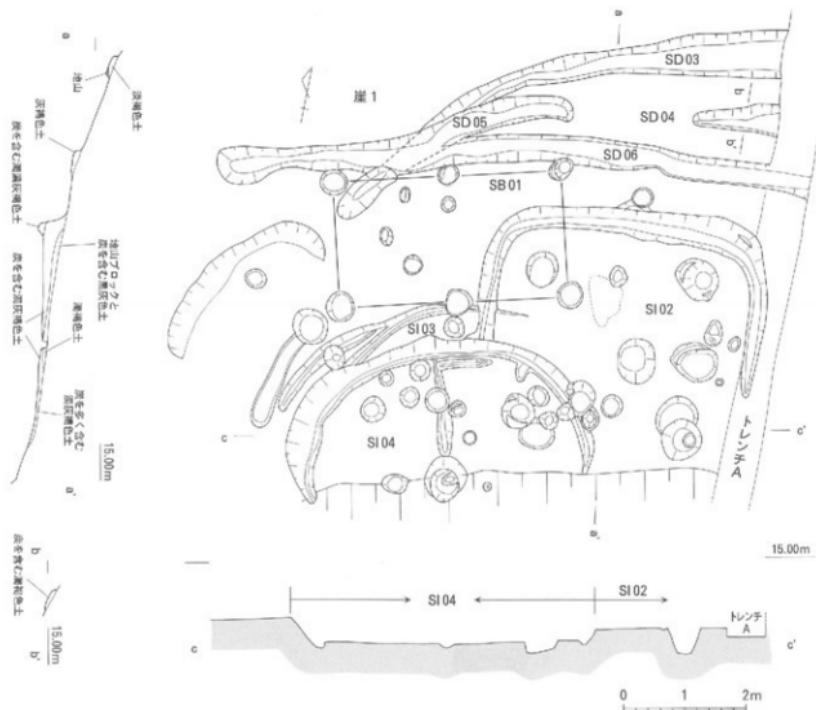
施された弥生時代中期の壺破片で、口径16.4cm（推）を測る。2は弥生時代後期の複合口縁の甕、3は注口土器の把手部分である。4は底部で底径9.8cm（推）を測る。5は底部で外面はミガキ調整されており、底径11.0cm（推）を測る。

(3) 崖1～C区

崖1の裾から溝4条、C区の狭い平坦地から堅穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、溝2条、若干のピットを検出した（第15図）。

堅穴住居跡3棟と掘立柱建物跡1棟は複雑な切り合い関係にあった。

最初に造られたのが堅穴住居SI04で、それが埋まつた後にSI04より若干西側に張り出してはいるが、ほぼ同じ位置の非常に浅いレベルで円形堅穴住居SI03が造られている。この状況は掘削後に既に上層を観察して初めて分かった事実である。そして、それも廃棄されて埋まつた後、堅穴住居SI03より深く、SI04より浅いレベルで隅丸方形の堅穴住居SI02が造られ、それが廃棄されて埋まつた後に掘立柱建物SB01が造られている。堅穴住居跡SI03・04の2棟は江戸時代の運河開削時に削平されて約半分を失っていた。



第15図 崖1裾とC区の以降検出状況

崖1の裾に掘られた溝は4本あるが、その位置や形状から溝SD03、05、06は竪穴住居跡SI02に伴うものと判断する。溝SD04はSD05となつがっていたかもしれないが、東側の調査区外の状況が不明であるため明言は避けたい。

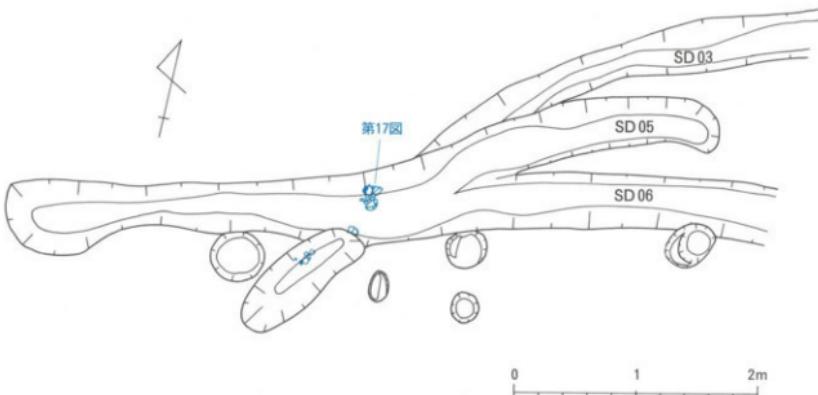
崖1は比高約3mを測り、中世の大勝間山城築城に際して切岸として普請された可能性が高いと考えていたが、弥生時代の段階で平坦面を作り出すため、ある程度削られて既に崖に近い地形になっていたようである。もちろん、中世になってさらにこれが切岸として改めて整備されたことは十分に考えられる。

①溝SD03・05.06

(遺構)

崖1の裾に掘られた3条の溝SD03、05、06は1ヶ所で重なり合っていた(第15図)。その交差部分に畦を残し、畦の土層から溝の相対的な新旧を明らかにしたいと考えていたが、浅い上に樹根が多くそれを判断することはできなかった。また、3条の溝が交差する地点から南西方向に0.9m伸びた溝が存在するが、これが溝SD03から続くものか溝SD05から続くものかも不明である。ただ、同一個体の甕の破片が3条の溝の交差部分と南西方向に伸びた溝から出土しているので(第16図)、SD03またはSD05のどちらかが1番最後に掘られた溝と考えられる。

溝SD03は竪穴住居跡の山手側に弧を描くように掘られた溝である。最大幅80cm、最深10cm強を測り、排水を図る溝としては至極心もとない。現在は崖1の裾に位置しているが、この溝が掘られた時



第16図 溝 SD 05 遺物出土状況図



第17図 溝 SD 05 出土遺物実測図

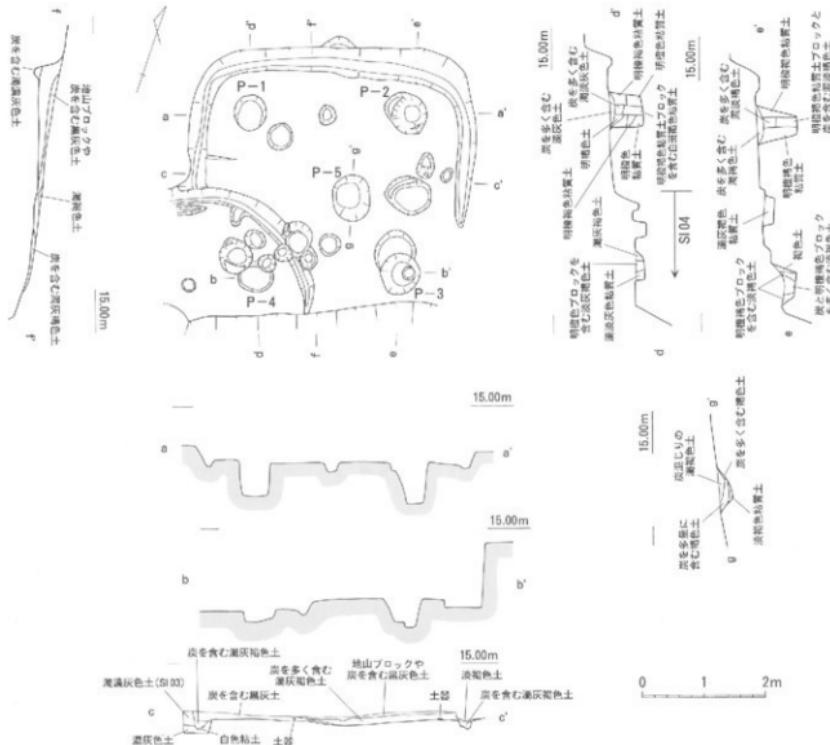
期には地表面のレベルがもっと高く緩やかな傾斜であったのかもしれない。

溝SD05は溝SD04とつながっていた可能性もあり、もしそうであればこれも堅穴住居跡SI02の山手側に弧を描くように掘られた排水溝と理解できる。そうでなければ、溝SD03の補助的な排水溝であろう。最大幅55cm、最深10cm弱を測る。

溝SD06は崖1の最下端に沿うように掘られた直線の溝である。最大幅50cm、最深15cmを測り、埋土は灰褐色土である。

(遺物)

溝SD03、05、06がちょうど交差する地点と、そこから南西方向に伸びる溝の底部から、約半個体分の甕が出土した(第16・17図)。口径16.5cm(推)、頸径13.4cm(推)を測る複合口縁の甕で風化が著しいが、弥生時代後期末の甕である。後述する堅穴住居跡SI02から出土した土器と同時期のものと考えられる。



第18図 堅穴住居跡 SI02 遺構図

②堅穴住居跡SI02

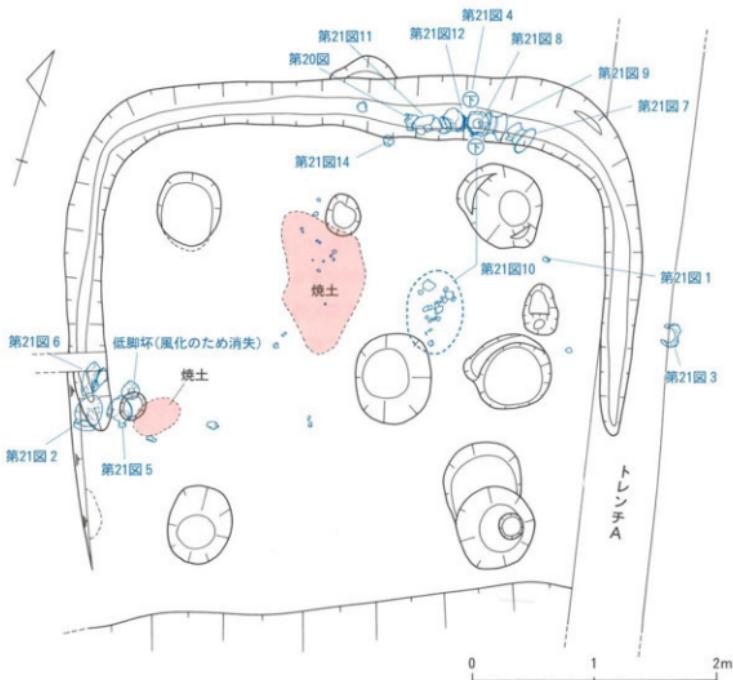
(遺構)

隅丸方形の堅穴住居跡である(第18図)。

遺構の南端は佐陀川開削の際に削り取られているほか、南端付近では遺構面が侵食されている。

法量は、床面で東西4.5m、南北は主柱P-2と排水溝の位置関係を主柱穴P-3に当てはめて4.3mと復原できる。床面の深さは北壁で40cm、標高は14.05mを測る。

床面周縁には排水溝が巡らされていたと思われるが、東辺、西辺とも南方ほど狭く浅くなつて終には消失し、南辺は完全に消失していた。最も残存状況が良かった北辺で観察すると、排水溝は幅23cm、深さ7cm前後を測り、埋土は炭を含む濁灰褐色土であった。4ヶ所の主柱穴の心々距離はP-1とP-2で2.6m、P-2とP-3で2.6m、P-3とP-4で2.5m、P-4とP-1で2.7mを測り、主柱穴の心から排水溝の内側上端までの距離はP-1で西へ65cm、北へ70cm、P-2で北へ60cm、東へ75cmを測る。主柱穴はいずれも上端直径52~60cm、下端直径30~50cm、深さは58~64cmと、直徑が大きくて深いしっかりしたものであった。土層断面を観察すると、4主柱穴全てに木柱の痕跡が残っており、直徑18cm程度の丸太材が使用されていたことがわかった。



第19図 堅穴住居跡 SI02 遺物出土状況図

中央ピットP-5は4主柱穴の中心より少し東に位置していた。埋土は4層に分けられ、下から淡褐色粘質土、炭を多量に含む褐色土、炭を多く含む褐色土、炭混じりの褐色土となっており、炭を含む層が目立った。

屋外の排水施設は、前記したとおり溝SD03、05、06がそれにあたると考えられる。

(焼土)

焼土は大きく分けて2ヶ所で検出した。1ヶ所は40×22cm程度の楕円形で、主柱穴P-1とP-2の中間より若干主柱穴P-4方向に近い所である。すぐ近くには甌2個体が転がっており、ここで煮炊きをおこなっていたと思われる。もう1ヶ所は120×60cmと大きく不整形な形状の焼土で、主柱穴P-1とP-2のほぼ中間から南に向けて広がっていた。

(遺物出土状況)

この堅穴住居跡からは、生活をしていた時そのままの様な状況で土器が出土した。そのままであっても、木棚の上などに並べられていたものが、有機質が朽ち果てると同時にだれ落ちたような状況と表現したほうがより正しいかもしれない(第19図)。

上記した小さな焼土の西側では完形の甌2(第21図2・5)と器台(6)1、低脚杯1が出土した。低脚杯は床面に伏せた状態、甌(5)1は床面に横たわり、もう1つの甌(2)と器台は排水溝に落ち込んだ状態であった。後者の甌は器台に掘えられていたかもしれない。煮炊き具と焼土の関係から、この住居が廃棄される直前にはここで調理がおこなわれていたと思われる。

北辺の壁帶溝内では、完形の甌1、器台4、高杯3が一部上下に重なりながらも1列に並ぶように出土し、少し離れて完形の小型短頸甌が出土した。低い棚の上に並べられていたものがだれ落ちた状況と推察する。東から鼓形器台(第21図7)、鼓形器台(9)と下方に甌(4)、鼓形器台(8)と下方に高杯(10)、高杯(12)、高杯(11)、鉄製品(第20図)という順番で転がっており、元来は器種別に几帳面に並べられていたようである。推測の域を出ないが、小型短頸甌がやや離れて転がっていたのは、軽くて丸味を帯びているため転落した際に転がったのかもしれない。

床面には小さな土器片が多数散乱していたが、復原できそうなものは無く、形状が判別できたのは壺の口縁部1点のみであった。その他には東辺の排水溝の外側で甌の破片が出土した。口縁部を下にした状態で比較的大きい破片であったが、風化が著しくほとんど取り上げることはできなかった。

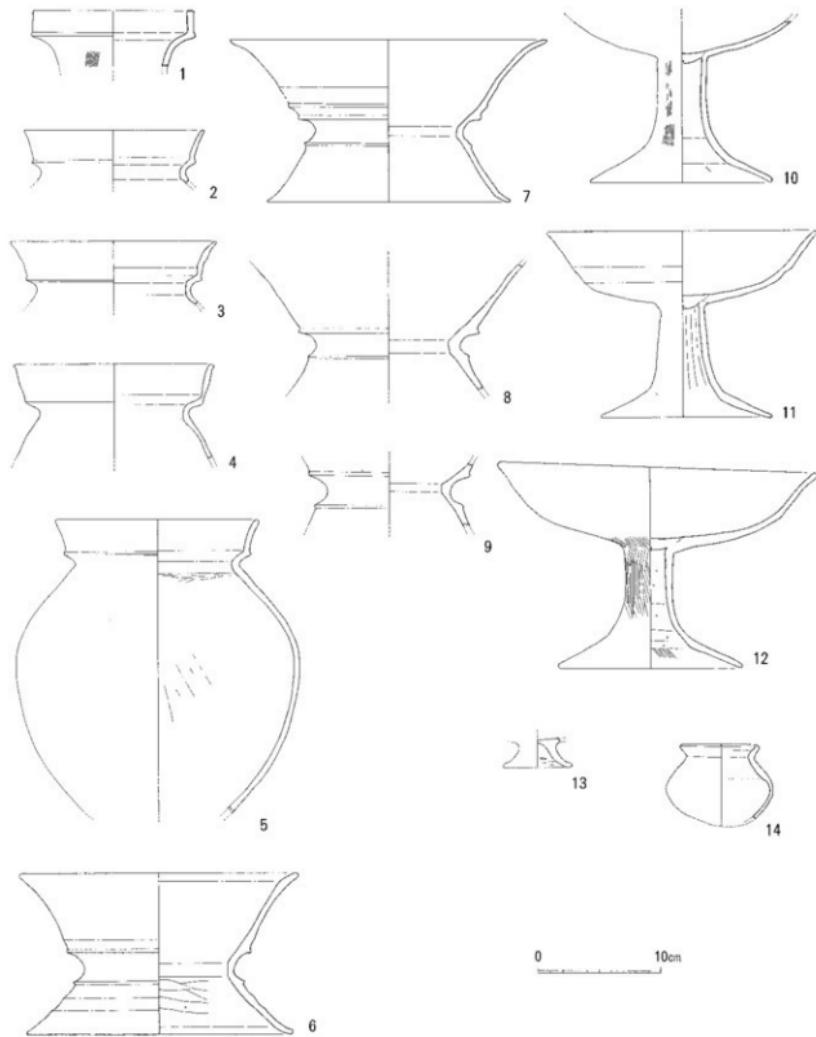
以上、遺物の出土状況について記したが、弥生時代後期末の堅穴住居内で使用されていた土器の組成がわかる一例として非常に重要な資料になるものと考える。ただ、いずれの土器も風化が著しく、完形で出土した個体も大半は取り上げ不能であったことが残念である。



第20図 堅穴住居跡 SI02 出土遺物実測図(鉄製品)

(遺物)

埋土中で浮いた状態で出土した遺物を含めて、鉄製品 1、壺 1、瓶 4、鼓形器台 4、高环 3、低脚
环 2、小型短頸壺 1 が出土した（第20、21図）



第21図 積穴住居跡 SI02 出土遺物実測図（土器）

鉄製品（第20図）は鈴の付着が著しく種類は不明である。一部で断面が円形～隅丸方形の細長い心が観察できるので、小型刃器の茎かもしれない。

土器は風化が著しく、表面に付着した土とともに器表面が剥離し、取り上げると粉になるケースもあり、残存状況が非常に悪い。21図1は壺で、頸部外面にハケメ調整が施されている。2～5は複合口縁の壺で、口縁の外面に擬凹線は施されていない。5は内面にヘラケズリの痕跡が残っている。6～7は鼓形器台で筒部が短くて太く、器受部と脚台部は大きく広がっている。6は脚台部内面には横方向のヘラケズリが残っている。7は器受部が特に大きく外反している。10～12は高环で全て円盤充填法によって形成されており、いずれも口縁の下面中央には刺突痕が見られる。10は脚部外面上にハケメが施され、内面は絞り痕が横方向の丁寧なヘラケズリで消されていた。11は脚部内面に顕著な絞り痕が残っている。12は脚部外面と裾部内面にハケメが施されており、脚部内面は絞り痕が横方向の丁寧なヘラケズリで消されていた。13は遺構面から浮いて出土した低脚環の脚部である。14は丸底の小型短頸壺で、口径6.5cm、頸径5.6cm、器高6.7cmを測る。

上記した土器は松本編年V-4様式の中に収まるものであり、これをもって堅穴住居跡SI02が廃棄された時期とする。

③堅穴住居跡SI03

（造構）

平面プラン円形の堅穴住居跡である（第22図）。

後述する円形堅穴住居SI04が廃棄されて埋まつた後、約80cm西方にスライドしているがほぼ同じ場所に造られている。床面レベルが浅くなる造り替えで、現地表面から浅いため遺構の残存状況は非常に悪かった。第22図のa—a'ラインの土層で見ると、炭を含む白灰褐色土層の上面が床面と考えられるが、その層が北壁から南方へ2.4mかろうじて残存している状況である。

床面の深さは北の深いところで13cm、標高は14.18mを測る。

壁帶溝は2m残っており、そこで観察すると幅13cm、深さ8cm、埋上は炭を含む淡灰色土であった。しかし、この排水溝から床面の直徑を復原することは困難である。

床面の法量は不明で、平面的に床面の遺構を検出することはできなかった。土層断面a—a'を観察すると、ピットP-2が堅穴住居跡SI03に伴うことだけは確実である。

（焼土）

a—a'ラインの土層より、ピットP-2から20cm南の地点で焼土を確認した。この焼土の大部分は現地表面の腐葉土直下から出土し南端は流されていたので、広がりの範囲は不明だが、しっかり焼けていることだけは確認できた。

（遺物）

堅穴住居跡SI04に伴う遺物が混じっている可能性が少ないので、SI03のわずかに残った床面とその埋土から出土した遺物3点を第23図に掲載した。

1は口縁端部に2条の凹線が巡らされた壺で、口径11.0cm（推）、頸径10.2cm（推）を測る。頸部が極端に折れ曲がって肩が張るタイプで、松本編年ではIV-2様式にあたる。2の壺は口縁端部が上方に肥厚して3条の凹線が巡らされている。頸部の折れ曲がった角度が鋭角であることから、これも肩が張るタイプであろう。3は底径6.3cm（推）を測る底部で、外面はハケメ調整である。

1の壺をもって、堅穴住居跡SI03が廃棄された時期を考えたい。

④豊穴住居跡SI04

(遺構)

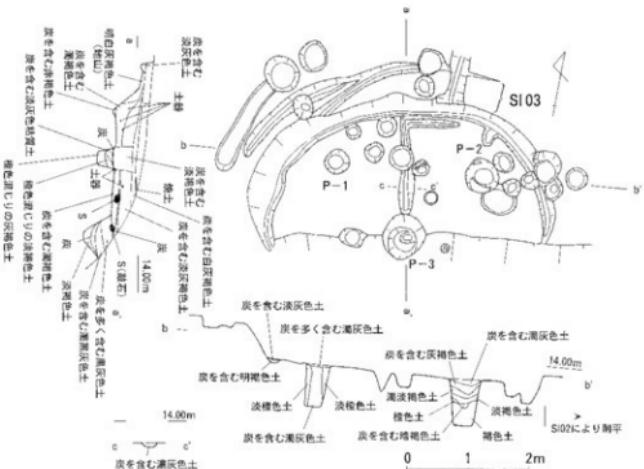
平面プラン円形の豊穴住居跡である(第22図)。

遺構の南側半分は佐陀川開削の際に削り取られていたが、かろうじて残っていた中央ピットと排水溝から復原すると、床面の直径は4.25mである。

床面の深さは北の深いところで50cm、標高は13.63mを測る。

床の周縁には壁帶溝が巡らされ、幅8~16cm、深さ7cm前後を測り、埋土は炭を含む赤褐色土であった。柱穴はピットP-1、P-2が深いことから候補に挙げられ、P-1は上端直径43cm、下端直径28cm、深さ70cmを測り、土層断面には木柱を据えた痕跡も確認できた。P-2は上端直径58cm、下端直径33cm、深さ73cmを測る。床面が約半分しか残っていないところに深いピットが2ヶ所しか存在しなかったので、上屋は4主柱穴であった可能性が高い。P-1とP-2の心々距離は2.45mを測り、P-1の中心から壁帶溝内側の上端までの距離は47cm、P-2の中心から壁帶溝内側の上端までの距離は58cmを測る。

中央ピットP-3は南側半分の上端が削り取られていたが、断面が擂鉢状を呈するもので、直径72cm、



第22図 豊穴住居跡 SI03・04 遺構図



第23図 豊穴住居跡 SI03 出土遺物実測図

深さ57cmを測る。埋土は下方から、淡褐色土層、炭層、炭を含む濁黒灰色土層、炭を多く含む黒灰色土層で、炭の存在が目立った。

また、中央ピットの北端から北辺の壁帶溝まで1条の溝が掘られていた。溝幅は14~25cm、深さ8cmを測り、断面は緩やかなU字状を呈し、埋土は炭を含む濃灰色土であった。また、この溝から壁帶溝の手前8cmのところで東方に80cm伸びる溝も検出した。幅12cm前後、深さ8cmを測る断面U字状の溝で、埋土は炭を含む濁灰色土であった。性格は不明であるが、後者の溝は壁帶溝と並行して掘られていることから、排水関係ではなく、間仕切りや屋内施設の設置に関係する用途であったと思われる。

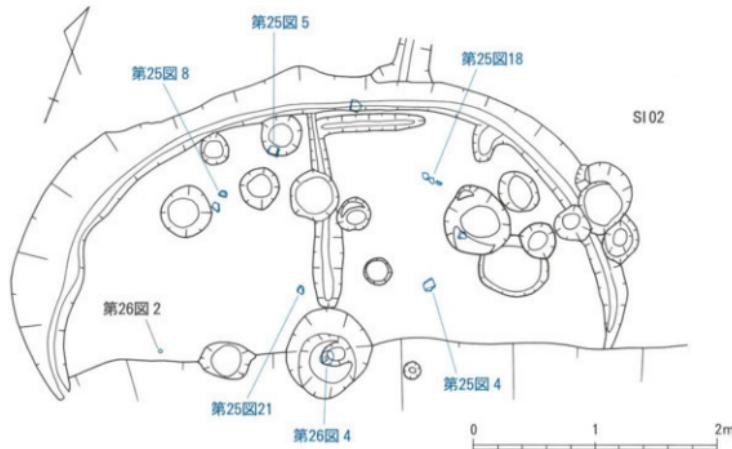
(遺物出土状況)

遺物の出土状況は第24図のとおりである。中央ピットの埋土直上から完形の敲石が出土したほかは、接合不可能な小さな土器片が散在する程度で、原位置を保つものは出土しなかった。

埋土中からは比較的多くの土器片と石器が出土した。

(遺物)

第25図の1は広口壺の口縁で、端部のフラット面は内傾して3条の凹線が巡らされている。2は広口壺の頸部で少なくとも3条の凹線が巡らされ、その上部は縦方向のハケメ調整が施されている。3は壺の小片で、肩部に連続斜線がヘラ描きされている。4は壺の胴部で、外面は上方からヘラ描きの連続斜線、その下にハケ状工具による連続刺突が施され、下方はミガキ調整が施されている。内面は下から上方向のケズリで、上方ではその上にハケメ調整が施されている。3と4は同一個体かもしれない。5は風化が著しくてわかりにくいかが装飾性に富んだ甕である。口縁端部は上方に拡張されて2条の凹線が巡らされ、その上にハケ状工具による連続刺突が施されている。胴部は上方から縦方向のハケメ、波状文、4条凹線文、波状文、4条凹線文、ハケ状工具の連続刺突文が施されている。胴部



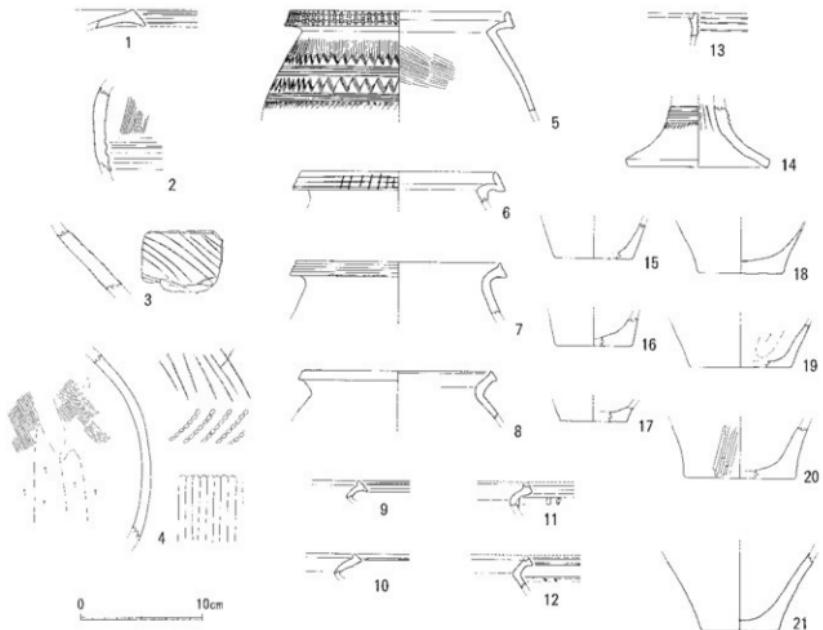
第24図 積穴住居跡 SI 04 遺物出土状況図

内面はハケメ調整である。6は5に近似した甌の口縁部である。口縁端部は上方に大きく拡張して3条の凹線が巡らされ、その上から連続斜線がヘラ彫きされている。7は甌である。頸部の角度が比較的緩やかで、蓋に分類した方が正しいかもしれない。口縁端部は若干上下に拡張され、内傾するフラット面には3条凹線が巡らされている。8は甌で、口縁端部は若干上下に拡張されているが、フラット面に凹線は巡らされていない。9～10は特徴のある極小破片を図面化したもので、9は口縁端部が若干上下に拡張されて2条凹線が巡らされたものである。10は口縁端部が若干上方に張り出しが、フラット面の幅が狭く1条の凹線は明瞭でなく古い様式をとどめている。11、12は頸部外面に指頭圧痕文帯が巡らされたもので、口縁端部は若干肥厚して11では2条凹線、12では1条凹線が巡らされている。

13は直口口縁の鉢で、口縁外面には少なくとも3条の凹線が巡らされている。

14は高杯の脚である。脚外面のほぼ中央部には少なくとも5条の凹線が巡らされており、その直下には刻み目が施されている。底の端部は肥厚しないフラット面で、凹線は巡らされていない。内面には絞り痕が顯著に残っている。

15～11は底部である。底径は、復原推定値で15が6.6cm、16が6.4cm、17が5.4cm、18が6.8cm、19が8.4cm、20が9.0cm、21が6.2cmを測る。全て小さめの平底で、極端に小型化したものや丸味を帯びたものは見られなかった。



第25図 積穴住居跡 SI04 出土遺物実測図（土器）

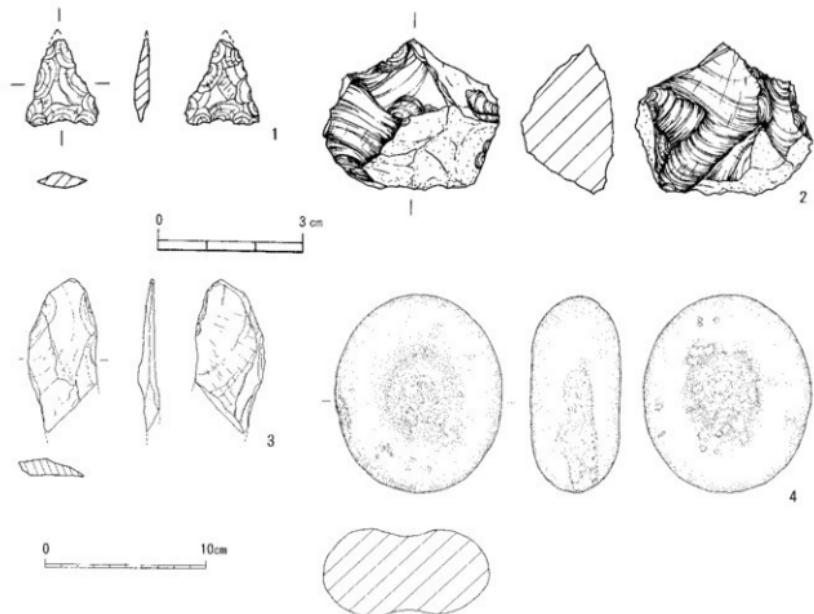
以上の土器は松本編年IV-2様式の範囲内に収まるが、10の甕口縁部や14の高環脚部はその中でも若干古いタイプと考えられる。以上のことから、堅穴住居跡SI04が廃棄された時期は松本編年IV-2様式の中でも早い時期であったと考えたい。

第26図は石器類で、1は安山岩系の石材で作られた鎌で、先端部をわずかに欠損するが残存状況は良く、残存全長1.7cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重量0.58gを測る。

2は黒曜石の石材である。この黒曜石には風化面が多く、荒剣の際に出た石の可能性が高いが、これから小型石器を作ることも十分にできたであろう。縦3.1cm、横3.6cm、最大厚1.9cm、重量21.2gを測る。

3は片岩系の石材を使用した刃器未製品で、刃部を作ろうとした剥離痕が顕著である。製作中に折れたのであろうか、大きく割れた痕跡が残っている。残存長9.6cm、幅4.3cm、最大厚1.3cm、重量43.9gを測る。

4は敲石である。両面ともよく使い込まれており、中央には 6.5×5 cm、最深0.6cmの楕円形のくぼみができる。側面にも若干の使用痕が認められる。縦12.3cm、横10.45cm、最大厚5.5cm、重量1,080gを測る。



第26図 堅穴住居跡 SI04 出土遺物実測図（石器）

⑤掘立柱建物跡SB01

(遺構)

標高14.7mの緩斜面に建てられた、南北方向1間×東西方向2間の掘立柱建物跡である。

柱穴の直径は、P-1が上端48cm、下端40cm、P-2が上端40cm、下端25cm、P-3が上端42cm、下端20cm、P-4が上端47cm、下端38cm、P-5が上端46cm、下端40cm、P-6が上端50cm、下端37センチを測る。

柱穴間の心々距離は、P-1とP-2間が1.9m、P-2とP-3間が1.9m、P-6とP-5間が1.9m、P-5とP-4間が1.9mを測り、東西方向の柱穴間距離はほぼ等しい。また、P-1とP-6間が2.0m、P-2とP-5間が2.1m、P-3とP-4間が2.0mを測り、南北間の柱穴間もほぼ等しい。

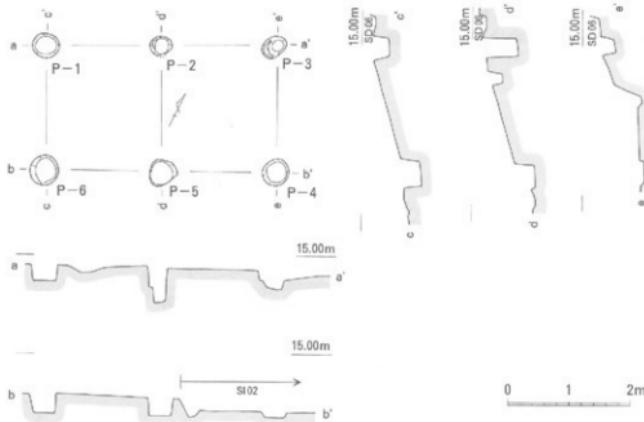
ところが、柱穴の下端標高値がa-a'ラインとb-b'ライン間では大きく違っている。

a-a'ラインの柱穴の下端標高値は、P-1が14.50m、P-2が14.45m（調査時の掘り過ぎで14.20mとなっている）、P-3が14.45mとはば等しく、b-b'ラインの柱穴の下端標高値はP-6が13.0m、P-5が13.0m、P-4が13.0mと全く等しいのだが、b-b'ラインの下端標高値はa-a'ラインの下端標高値よりも15~20cm低くなっているのである。

そこで、改めて掘立柱建物SB01が建てられた地形を確認してみると、a-a'ラインの標高がb-b'ラインよりちょうど25cm高い傾斜地になっている（第8図）。このような場所では加工段でフラット面を造成した後に掘立柱建物を建てるケースが多いのであるが、ここではそれが省略されたようである。地盤の高低にかかわらず、同じ深さの柱穴を掘って柱を据えたと考えられる。

(遺物)

この遺構に伴う遺物は出土しなかった。したがって、掘立柱建物SB01が使用、廃棄された時期は不明であるが、堅穴住居跡S102が完全に埋没した後に建てられたことは確実である。



第27図 掘立柱建物 SB01 遺構図

(4) 崖2～D区

本来であればC区とD区の弥生時代の遺構面はながらに繋がっていたはずである。ところが、江戸時代の佐陀川開削時の掘削で比高約1mの崖2が形成され、崖2の東側約半分は垂直もしくはオーバーハングした崖になり、崖2の西側約半分はかろうじて弥生時代の遺構面が残っていた。

D区の北端部から南へ6mの範囲は江戸時代の採土によって削平され、帯状に弥生時代の遺構面を失っているが、それ以外の場所では非常に密度の高い遺構群が検出された。遺構には多くの切合関係が認められ、出土遺物から少なくとも弥生時代後期初頭から弥生時代後期末までの時期幅が存在することがわかった。

D区遺構面は西端の標高12.5m、南端の標高8.00mを測る比較的急な斜面で、人々はそこで生活をするために、段を設けてフラット面を造成し、溝を掘って生活域への降雨の流入を防いでいたと思われる。遺構としては加工段を作り掘立柱建物跡1棟のほか、性格不明の段状遺構6ヶ所、溝8条、不整形な落ち込み1ヶ所のほか、多数のピットを確認した。

狭い範囲に多数の段や溝が等高線に沿うように検出されたので、中央畦の土層からも検討を試みたが、一連の遺構単位を明確にすることはできなかった。したがって、以下では近くに存在する遺構を絡めての報告をおこなう。同じ図面上に掲載していても、必ずしも同一時期に存在した遺構とは限らないことを断っておきたい。

①溝SD07

(遺構)

佐陀川開削時の造成工事場所からわずかに外れた、D区北西の一段高い場所に位置する溝である。標高は13.00mを測る(第28図)。

溝は幅75～85cm、最深部18cm、南西方向で浅くなつていには上端と下端が合流し、長さは4.8mを測る。ただし、山手側の上端と下端はさらに南西方向に延びているので、本米はもっと長い溝であったかもしれない。埋土は炭を含む淡褐色砂質土であった。

この溝のすぐ南は江戸時代の造成工事によって遺構面が削平されているため、溝SD07の性格は不



第28図 溝SD07と採土跡遺構図

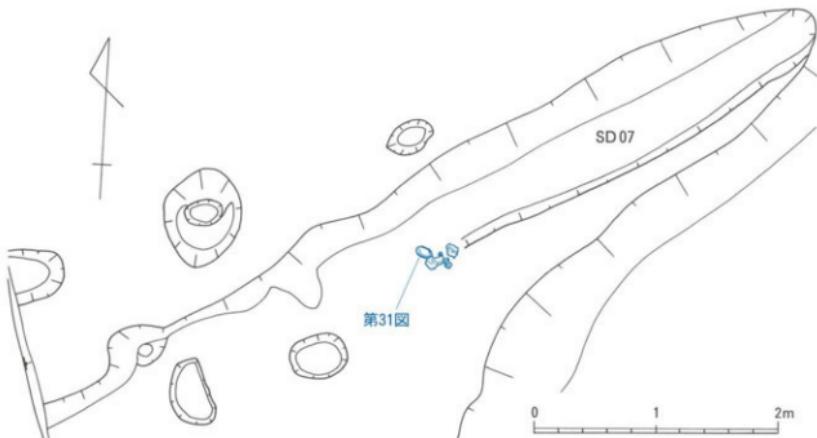
明である。

(遺物)

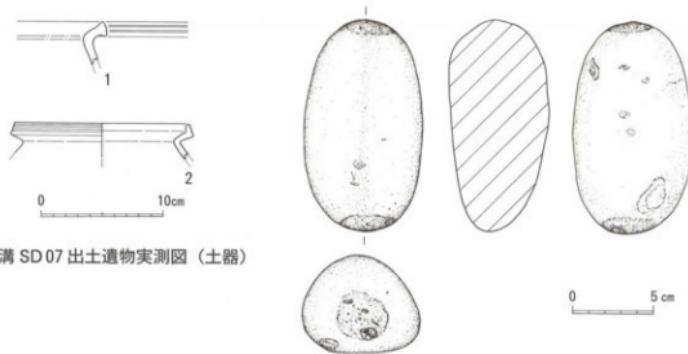
溝埋土中から土器の破片2点が出土したほか、造構面直上で集石を確認し、その集石の中から磨石1点が出土した(第29図)。

第30図1は甕の口縁部である。口縁端部が肥大して2条の凹線が施されており、外面には若干の媒が付着している。2も甕口縁部である。口縁端部が上方に拡張されて2条の凹線が施されている。

第31図は磨石である。完形で残っており、全長13.1cm、幅7.4cm、最大厚6.1cm、重量882gを測る。上端と下端に、かなり使い込んで円形につるつるのフラット面となつた使用痕が残っている。それは



第29図 溝 SD 07 遺物出土状況図



第30図 溝 SD 07 出土遺物実測図(土器)

第31図 溝 SD 07 出土遺物実測図(石器)

かに使用痕は認められず、敲石とは用途が違うものである。

②段SX01と溝SD10

(遺構)

段SX01は上端、下端とも直線を意識して造られていない(第32図)。また、何らかの意図があつて曲がりくねったラインにしたとも考えられない。段の高低差は中央部分で34cm、東端で溝SD09に切られており残存長は7.6mを測る。下のフラット面は標高10.45mを測る。埋土は下から炭を含む濁黄灰褐色土層、炭を含む灰褐色土層、炭を含む濃灰褐色土である。

溝SD10(第32図)は直線の溝で、幅35cm、深さ4cm、全長4.34mを測る。西端から1.5mの地点では北方向に溝が38cm突き出している。埋土は炭を含む灰褐色土である。溝の南側で多数のピットを検出したが建物跡の配列は見つからなかった。ただし、溝SD10以南にはかなりの傾斜が見られるので、遺構面もろとも侵食された可能性も十分考えられる。

段SX01と溝SD10はほぼ平行しているが、両者の関連性については不明である。

(遺物出土状況)

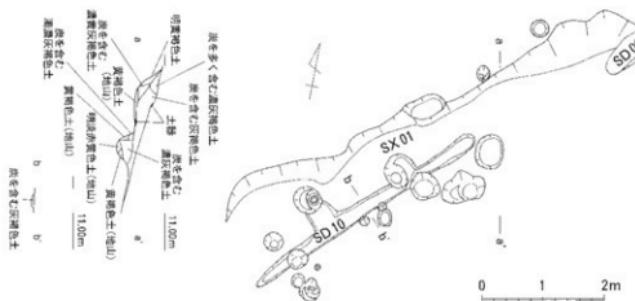
段SX01の東側下端遺構面から多数の土器、石器が出土した(第33図)。

土器は壊れたものが集積された土器溜りのような出土状況であった。土器片の残存状態は比較的良かったが、1個体に復原できそうなものは無かった。石器は土器溜りから少し離れた場所で、石器類だけでまとめて出土した。

(遺物)

第34図1は壺の口縁部で、口縁端部は上下に拡張して3条の凹線が巡らされている。2も壺で、口縁端部は若干上部に拡大して2条の凹線が巡らされている。

3はやや小型の甕で、口縁端部は上方へ直立気味に大きく拡張されて5条の擬凹線が巡らされている。接合はできないが、胴部外縁の肩部には5条の擬凹線による波状文と、ハケ状工具原体の連續刺突が施された、同一個体と思われる破片が出土している。頸部外縁に赤色顔料が残るが、外面全体に煤の付着が著しい。4は小型の甕で、口縁端部は上方に拡張されて4条の擬凹線が巡らされている。5は甕で、口縁端部は上方へ直立気味に大きく拡張されている。凹線は施されていない。6は甕で、

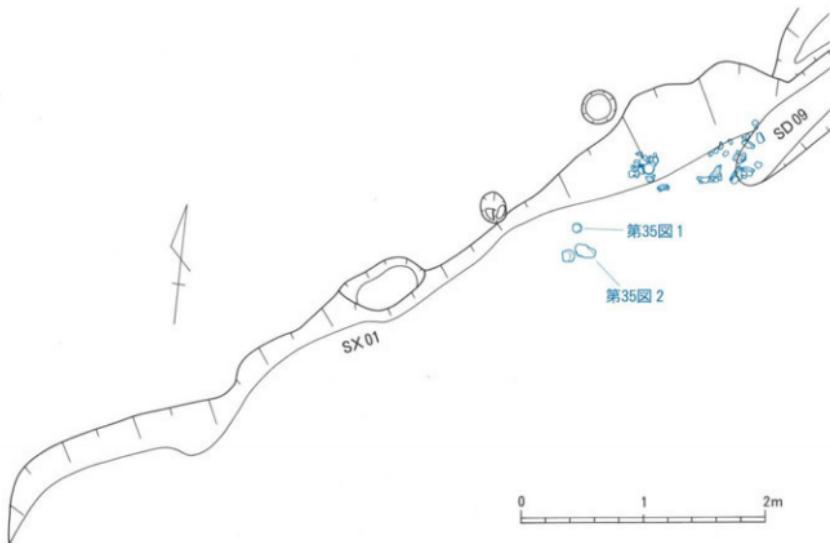


第32図 段SX01周辺の遺構検出状況図

口縁端部は上方に大きく拡張されて5条の擬凹線が巡らされている。肩部外面には箒状工具で波状文が巡らされ、波状文以下は煤の付着が著しい。胴部内面はヘラケズリ調整である。7は甕で、口縁端部は上方へ直立気味に大きく拡張されて3条の凹線が巡らされている。口縁外面には煤の付着が著しく、凹線内はほとんど煤で埋まった状態である。8は甕で、口縁端部は上方へ直立気味に拡張され、4条の擬凹線が巡らされている。頸部内面には横方向にハケメが施され、その下はヘラケズリ調整である。9は甕で、口縁端部は上方へ直立気味に大きく拡張され3条の擬凹線が巡らされている。10は甕で、口縁端部は上下に拡張されている。風化が著しくて不鮮明だが3条又は4条の擬凹線が巡らされている。胴部内面はヘラケズリである。11は甕で、口縁端部は上下に拡張されて3条凹線が巡らされている。12は甕で、口縁端部は上方へ垂直に拡張されている。風化が著しくて不鮮明だが、3～5条の擬凹線が巡らされていたと思われる。13は甕で、口縁端部は上方へ垂直に拡張されて2条の凹線が巡らされている。14は甕で、口縁端部は上部に肥厚して3条の凹線が巡らされている。15は甕で、口縁端部は上下に拡張されて4条の擬凹線が巡らされている。16は甕で、口縁端部は上下に肥厚されて4条の擬凹線が巡らされている。

17は底部で、外面は下から上方向のハケメ、内面は不定方向のケズリ調整が施されている。18は底径3.2cmを測る底部で、底径の小型化が見られる。器面は内外面とも丁寧なナデ調整が施されており、底部の外面は赤色、その上は黒色に変色して二次的に火を受けた痕跡が残る。

19は高壊の脚端部である。外面には赤色顔料の痕跡が残っているが、風化が著しく明瞭ではない。以上、土器溜りから出土した土器の詳細を記してきたが、口縁端部に凹線が巡らされたものは7の甕1個体だけで、他はすべて擬凹線が巡らされていた。松本編年のV-2様式としたいところであるが、

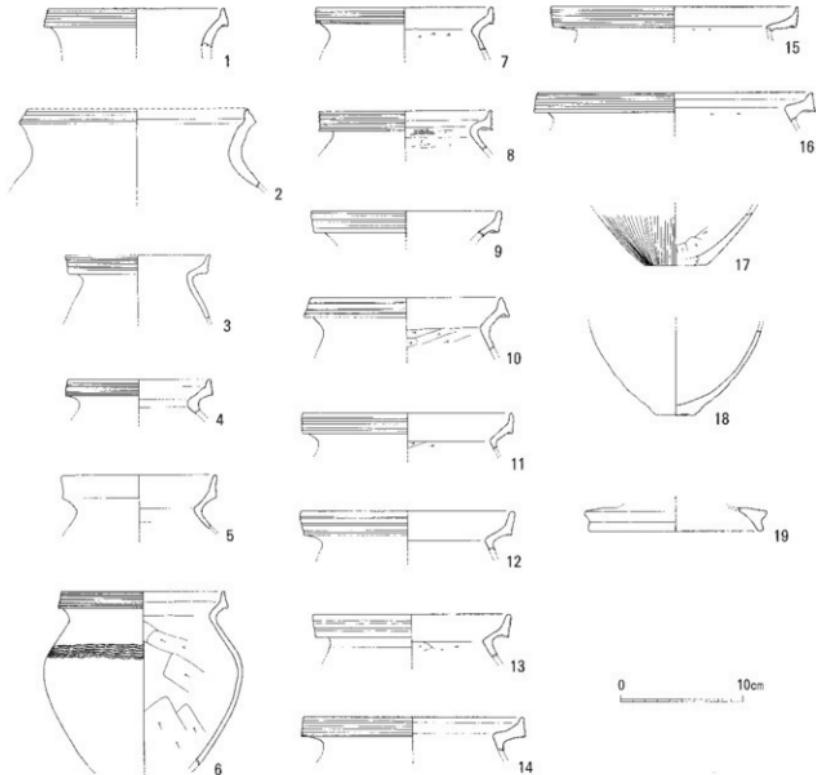


第33図 段 SX01周辺の遺物出土状況図

口縁端部の上部へ拡張された高さの平均値が低いため、松本編年V-1からV-2への移行期の土器群と考えたい。

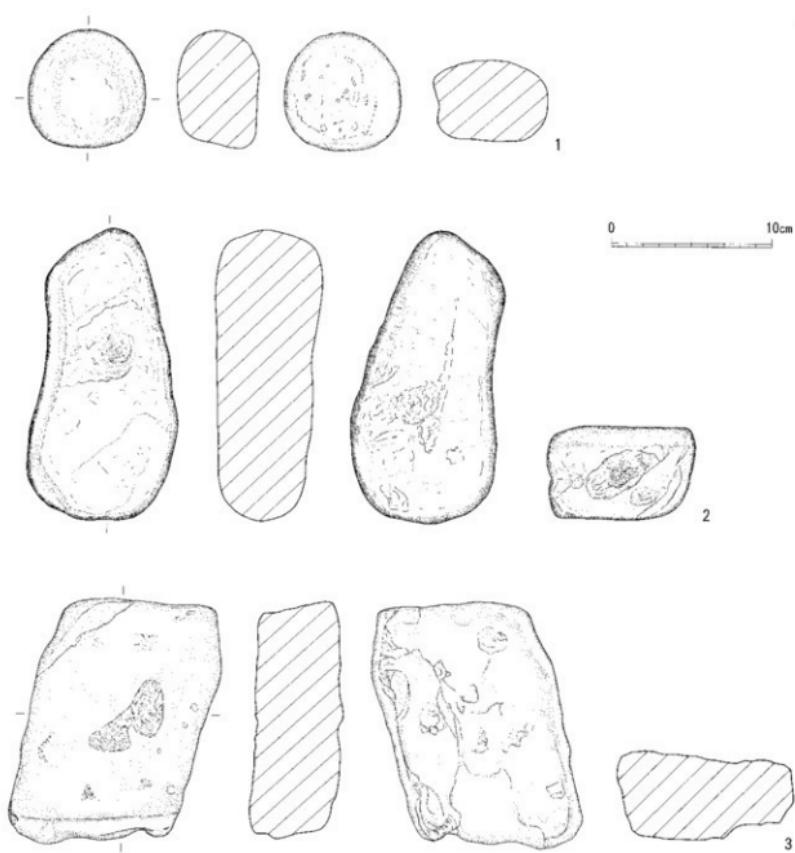
第35図の1は磨石である。縦7.3cm、横7.2cm、最大厚5.0cm、重量394.4gを測り、片面だけに円形につるつるの平坦面となった使用痕がある。使用痕の直径は4cmで、この他には使用痕は認められなかった。

2は広義の石皿であろう。縦18.1cm、横9.3cm、最大厚5.8cm、重量1,525gを測る。石材は不明だが硬い石である。両面ともに真中から少し離れたところに、ゴツゴツ感の残る浅い窪みが残っている。また、図の下端部にも浅い窪みが認められる。これらの使用痕の状況から、硬いものを扱う時の受け石や、時には敲打する時にも使用されたものと考えられる。



第34図 段SX 01周辺出土遺物実測図（土器）

3も広義の石皿であろう。縦15.3cm、横11.0cm、最大厚5.0cm、重量1531gを測る。石材は軟質の砂岩である。片面がフラットに調整されており、真中より少しずれた所に 2×4 cmの楕円形で最深4mmの窪みが存在する。裏面は自然石のままである。

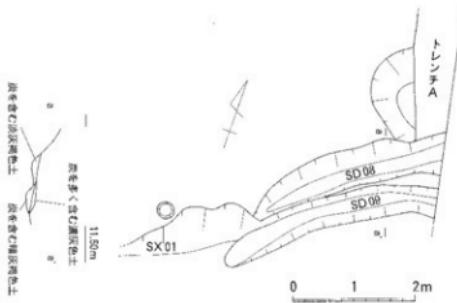


第35図 段 SX01周辺出土遺物実測図（石器）

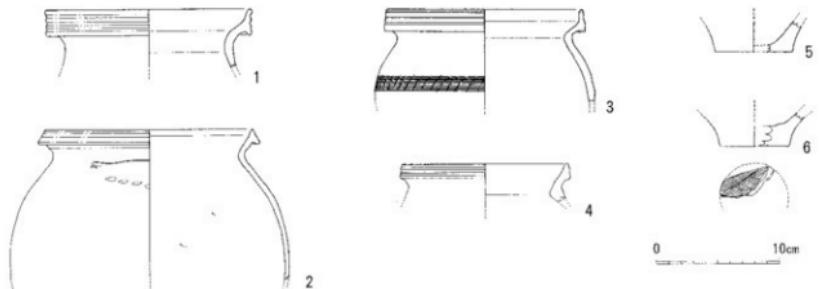
③溝 SD 08・09

(遺構)

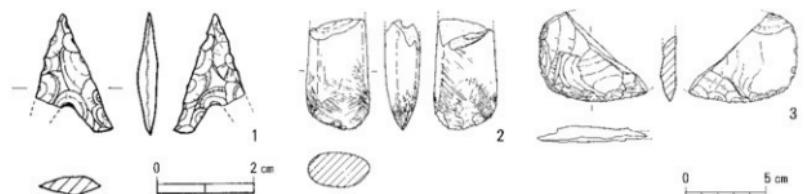
溝SD08は上端最大幅65cm、最深15cmを測る、断面緩やかなU字状の溝で、調査区外の東方へ延び



第36図 溝 SD 08・09周辺の遺構検出状況図



第37図 溝 SD 08・09周辺出土遺物実測図(土器)



第38図 溝 SD 08・09周辺出土遺物実測図(石器)

ているので全長は不明である。埋土は炭を含む淡灰褐色土であった。

溝SD09は上端最大幅55cm、最深12cmを測る、断面緩やかなU字状の溝で、調査区外の東方へ延びているので全長は不明である。埋土は炭を含む暗灰褐色土であった。この溝は段SX01を切っている。

溝SD08と溝SD09はほぼ並行して掘られているが、一部切り合っている。切り合い関係にある場所a-a'で土層を観察したところ、SD09の方が新しいことが判明した。しかし、調査区外へと延びているこれら2本の溝がどのような性格を持っているのかは不明である。溝の南ではピットを検出しているが、範囲が狭いこともあり本来の姿を推測することはできない。

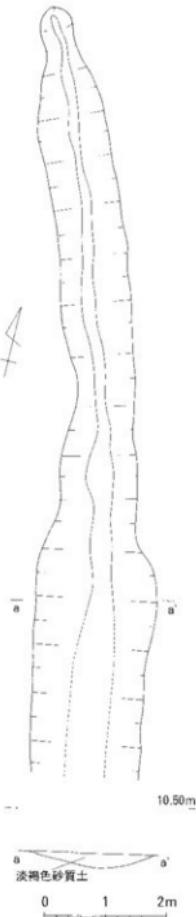
(遺物)

溝SD08の埋土から図化できる土器片は出土しなかったが、溝SD09からは第37図4の壺片が出土した。口縁端部は上下に肥厚して2条の凹線が巡らされている。風化が著しいが、口縁外面には若干の煤が付着している。

この土器片より、溝SD09は松本編年V-1様式の時期と考えられる。

第37図は、溝および溝に保護されたと考えられる、南側の平坦地埋土から出土した土器である。1は壺で、口縁端部は上下に肥厚して3条の擬凹線が巡らされている。2は壺で、口縁端部は上下に拡張されて3条の擬凹線が巡らされている。頸部直下にハケ状工具を押し当てて一周巡らせており、その痕跡は薄い。その下にはハケ状工具を押し当てた列点文が施されている。外面全体に煤の付着が著しい。3は甕で、口縁端部は上方に幅広く拡張され3条の凹線が巡らされている。器面剥離が著しく一部でしか観察できないが、胴部に日々細かいハケ状工具を押し当てて1週巡らせ、その上に重ねてハケ状工具で列点文を描いている。外面は煤の付着が著しい。5は底部で、底径6.2(推)cmを測る平底である。6も底部で、底径5.4cm(推)を測る平底である。接地面に丁寧なハケメが施されている。

第38図は溝の南側平坦地埋土から出土した石器である。1は鐵で、石材は小さな穴が無数にあいた黒灰色の硬い石材で、大根島の(松江市八束町)で産出する火山岩と思われる。全長2.5cm、最大幅1.3cm、最大厚0.4cm、重量1.01gを測る。片面の翼を欠損している。2は小型の蛤刃石斧で基部を欠損している。サスカイト製で全体に研磨の痕跡が顕著に残っており、残存長6.8cm、最大幅4.0cm、最大厚2.2cm、重量86.9gを測る。片面は滑らかな蛤状のカーブに加工されているが、片面は使用中に大きく剥離欠損したらしく、剥離跡のリングを消すように周囲から欠損部の中心に向けて丁寧な研磨が施されている。刃部先端には小さな剥離痕が多数存在する。使用痕か調整の跡か不明である。3は用途不明の刃器で、斜めに折れている。細かい押圧剥離を繰り返して鋭い刃部を作っている。石材は不明である。



第39図 溝SD12遺構図

④溝SD12

(遺構)

弥生時代の遺物^{包含層}上面で検出した溝である(第39図)。南北方向に掘られており、北では細く深めだが、南に下がるにつれて幅が広く浅くなり、ついには消失している。検出時の全長6.8m、北端の幅65cm、深さ35cm、a-a'での幅2m、深さ23cmを測り、埋土は淡褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

⑤溝SD11と段SX03

(遺構)

溝SD11は等高線と平行して掘られた浅い溝である(第40図)。a-a'地点で幅80cm、深さは16cmを測り、西側で深く東方では浅くなっていた。埋土は炭を含む灰褐色土で、微細な土器片をわずかに含んでいた。西側は調査時のサブトレで消滅し、東側は溝SD12で切られており残存長は約6mであった。

段SX03は比高20cm前後で、緩やかな傾斜の段である(第40図)。十層を観察すると、溝SD11が埋まつた後に掘られたものである。この段は西側では調査時のサブトレによって消滅しているが、東側では調査区外へと続いている。遺物は出土しなかった。

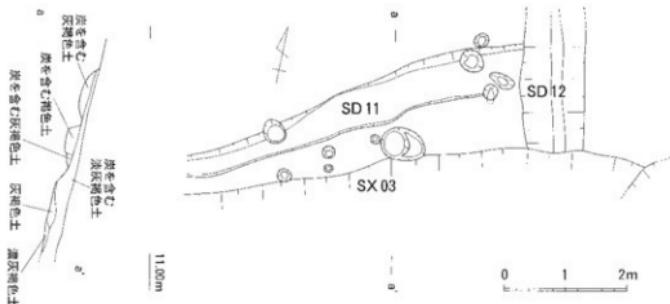
⑥加工段01

(遺構)

北の山を「コ」の字状に約30cmカットした加工段で、東西下端幅4.6m、南北残存幅1.3m、床面の標高は9.0mを測る(第41図)。

壁の下端添いには幅20cm前後、深さ約4cmの排水溝が掘られていた。埋土は灰色土で西側では多くの炭が混入していた。

ピットは焼垣沿いで3ヶ所検出した。大きく深いピットで、P-1は上端直径90cm、深さ80cm、P-2は上端直径58cm、深さ65cm、P-3は上端直径80cm、深さ63cmを測り、心々距離はP-1とP-2、P-2とP-3ともに2.4mを測る。半歳をおこなったところ、ピットの埋土には炭の混入が目立ち、P-3では直径12cmの柱の痕跡を見出すことができた。掘立柱建物が建っていたはずであるが、



第40図 段SX03周辺の遺構検出状況

南側が段SX05によって切られているため規模はわからない。

ピットP-1を掘り下げる段階で、西側約半分の溝が消失してしまった。

この加工段01は溝SD13によって切られている。

(遺物出土状況)

遺構面直上から多くの土器が出土した(第42図)。

ピットP-1の周辺では、大量の炭や焼土塊とともに完形の壺(第43図3)や甕(4)、高环(5)、低脚环(6)が出土したが、風化が著しく、その大半は取り上げることができなかった。また、中央よりやや東寄りの排水溝では、完形ではないが比較的大きい2個体分の壺(1・2)の破片が出土した。これらも風化が著しく、ほとんど取り上げることができなかつた。

(遺物)

第43図1は短頸壺で胴が張るタイプである。2も短頸壺である。3は口縁が内傾する壺で、頸部が細くて長い。胴部外面にハケメ調整が施されており、若干の煤が付着している。4は甕である。複合口縁に振凹線文は施されていない。5は高环の脚の一部である。6は低脚环である。風化が著しくて調整は不明だが、环部と脚部は円盤充填で成形されている。器高8.0cmを測る。

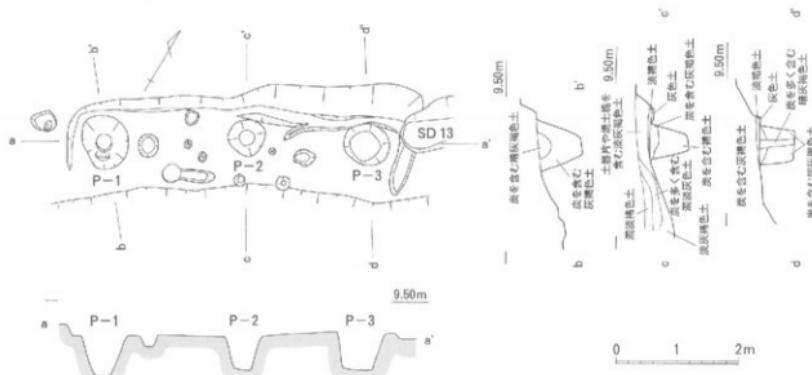
これらの土器は松本編年V-4様式に取まるもので、調査区の中では竪穴住居跡SI02から出土した土器群と同時期である。

(7)段SX05とその周辺の遺構

(遺構)

レンチを深めに掘ったため、第44図a-a'の土層ではわかりづらいが、淡明褐色土と暗灰褐色土の上面が弥生時代の遺構面である。その上に弥生時代の遺物包含層があり、溝SD14はその上面から掘られている。溝SD14は幅40cm前後、深さ約6cm、全長4.6mを測り、埋土は炭を多く含む濁灰色土である。しかし、この遺構は包含層の除去とともに消失してしまった。

最終遺構面で段SX05を検出した。段SX05は緩やかな段であるが、高低差は45cm前後を測る。東



第41図 加工段01 遺構図

側調査区外に延びているため全長は不明である。

段下の遺構面では多くのピットや短い溝、浅い落ち込みSX06を検出したが、整然とした並びは無く、掘立柱建物等の配置を見出すことはできなかった。

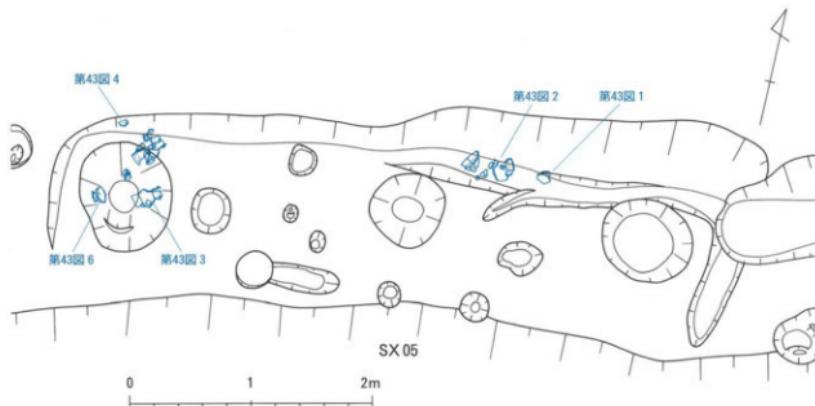
浅い落ち込みSX06は調査区外に続くもので、調査区内での平面プランは不整形な円弧を描き、深さは10cm弱を測る。埋土は炭を含む淡褐色砂質土であった。

(遺物出土状況)

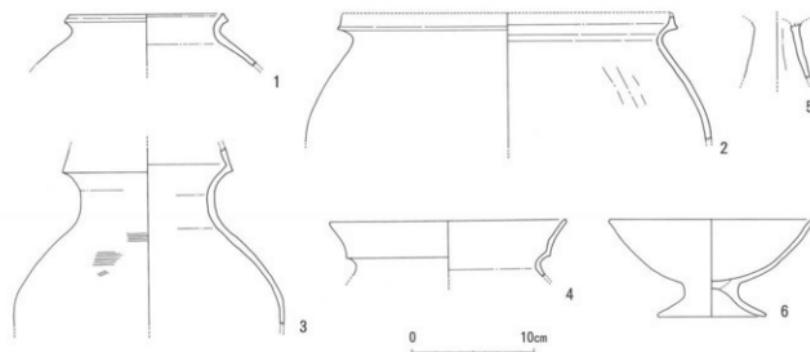
段SX05下の遺物包含層から土器片と石器が出土したほか、浅い落ち込みSX06の埋土から土器片と石器が出土した。

(遺物)

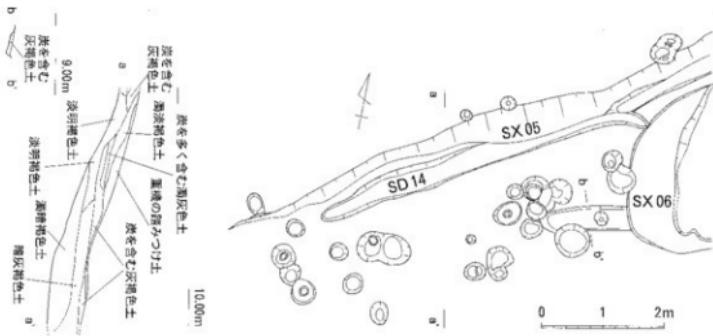
第45図は段SX05下の遺物包含層から出土した土器である。



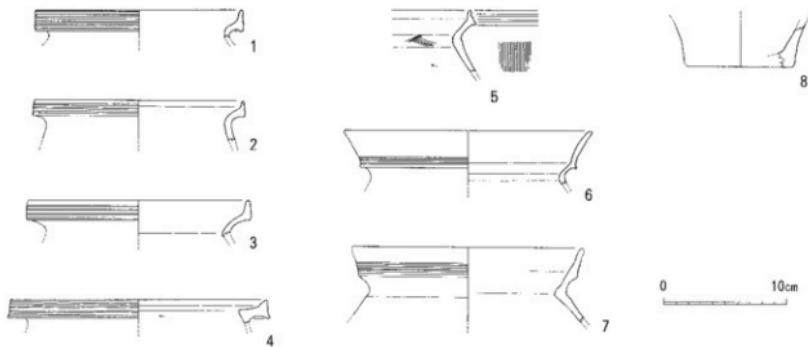
第42図 加工段01遺物出土状況図



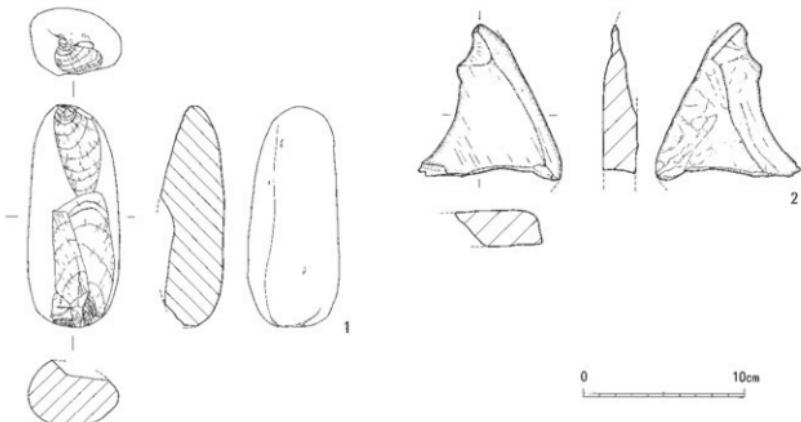
第43図 加工段01出土遺物実測図



第44図 段S X05と周辺の造構図



第45図 段S X05周辺出土遺物実測図（土器）



第46図 段S X05周辺出土遺物実測図（石器）

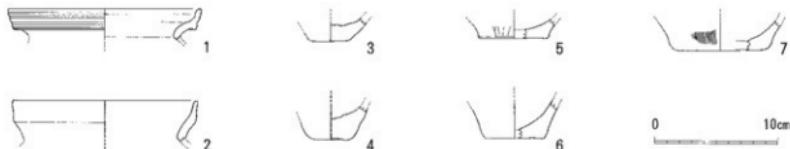
1～3は口縁端部の立ち上りが低い複合口縁の甕で、1は6条、2は3条、3は、4条の擬凹線が巡らされている。4は口縁端部が上下に拡張された甕で、フラット面には2条の凹線が巡らされている。5は口縁端部が上下に拡張された甕で、フラット面には2条の凹線が巡らされている。口縁周辺はヨコナデ調整であるが、胴部外面は縦方向のハケメ、頭部内面は横方向のハケメ、胴部内面はヘラケズリが施されており、頭部外面上には若干の煤が付着している。6は複合口縁の立ち上りが高く外反する甕で、口縁の下方だけに擬凹線が巡らされている。7も複合口縁の立ち上りが高い甕で、口縁上方は風化して不明だが下方には擬凹線が巡らされている。8は底部で、外面にはミガキ調整が施されている。底径8.6cm（推）を測る。

以上の土器は弥生時代後期の内に収まるが、時期幅が広い。

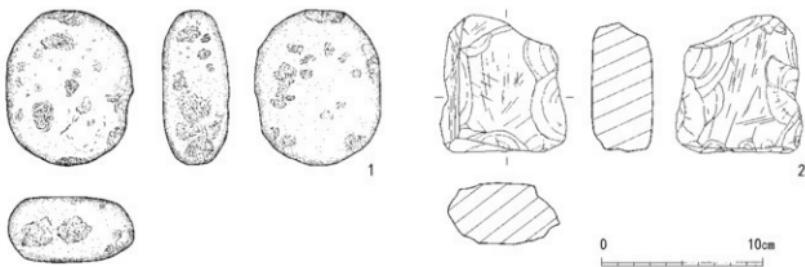
第46図は段SX05下の遺物包含層から出土した石器である。

1は種類、用途ともに不明の敲打石器で、上下端に大きな力を加えた痕跡が残っている。石材は黒色の硬い石で、ローリングされてつややかに光っている。長さ13.7cm、幅7.8cm、厚さ4.6cm、重量462gを測る。2は砥石で、片面と1側面に使用痕が残っている。石材は不明だが、緻密な石で、仕上砥石としても利用できそうである。破損しているが、縦9.6cm、幅8.9cm、厚さ2.3cm、重量162gを測る。第47図は浅い落ち込みSX06から出土した土器である。

1は甕で、複合口縁の立ち上りは低く、4条の擬凹線が巡らされている。2は甕で、複合口縁であるが擬凹線が施されていない。松本編年V-2様式まで遡れるので、1の甕と共伴する可能性も考えられる。3～7は壺甕類の底部で、6は接地面にもハケメ調整が施されていた。3は底径3.3（推）、



第47図 段SX06出土遺物実測図（土器）



第48図 段SX06出土遺物実測図（石器）

4は底径2.9cm(推)、5は底径5.8cm(推)、6は底径4.8cm(推)、7は底径7.6cm(推)を測る。

第48図は浅い落ち込みSX 06から出土した石器である。

1は敲石としているが、石材は軟質である。表面はザラザラしていて全体に凹凸が著しい。一般的な敲石とは性格、用途が異なるであろう。縦9.6cm、幅7.8cm、厚さ4.1cm、重量502gを測る。2は砥石である。周縁には多くの剥離痕があることから、使い易い形に整えているのかもしれない。使用痕は両面と1側面に有り、縦9.5cm、横7.8cm、厚さ3.7cm、重量300.9gを測る。

⑧段SX 07とその周辺の遺構

(遺構)

第49図のa—a'土層図中の、暗灰褐色土と砂質の濁淡灰褐色土層の上面が弥生時代の遺構面である。段SX 07は傾斜が急で、高低差35cm前後を測る。調査区の西から東まで存在するので全長は不明である。

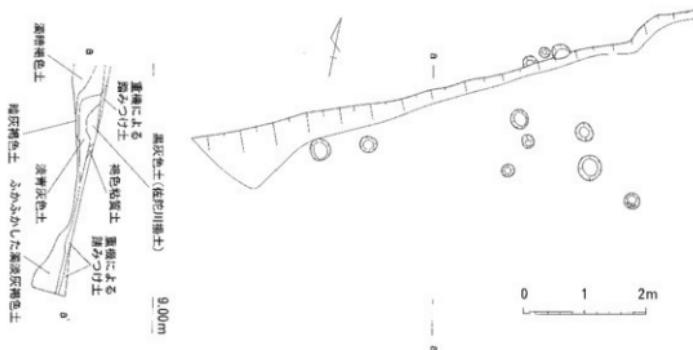
段下の遺構面から若干のピットを検出したが、いずれも直徑が小さくて浅いものばかりであった。

(遺物出土状況)

遺構面から出土した遺物は無かったが、遺物包含層中から土器片数点と石器6点が出土した。

(遺物)

第50図1は石鎌である。基部が若干抉られた小型品で、安山岩系の石材が使われている。全長1.5cm、最大幅1.3cm、最大厚0.5cm、重量0.73gを測る。2は黒曜石の剥片で、鋸かい加工は無いが、一部に連続押圧剥離が見られる。縦1.5cm、横3.6cm、厚さ0.7cm、重量2.52gを測る。3は細長いタイプの敲石で、両端に軽い敲打の使用痕が残っている。全長8.2cm、幅4.6cm、厚さ3.0cm、重量145.2gを測る小型品である。4も敲石である。剥離痕が1ヶ所存在するが、その他に使用痕は無くあまり使用されなかったようである。全長11.0cm、幅8.4cm、厚さ5.1cm、重量650gを測る。5と6は扁平な自然石の両端を打ち欠いて作成された右鍤である。5は大型品で全長10.4cm、幅8.0cm、厚さ1.7cm、重量169.2g、6は全長6.4cm、幅6.8cm、厚さ2.0cm、重量111.6gを測る。



第49図 段SX 07周辺の遺構検出状況図

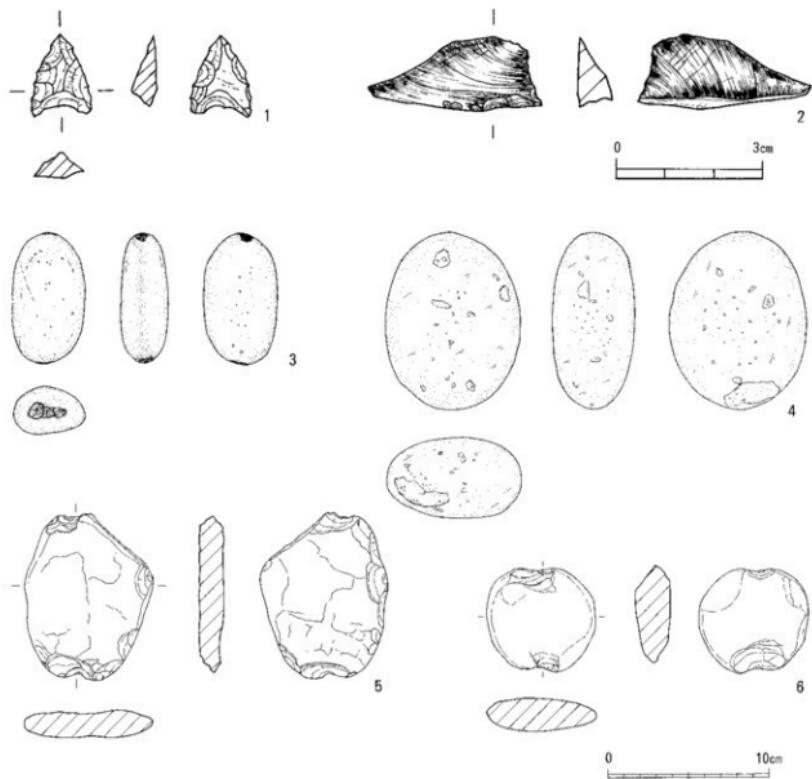
⑨造構に伴わない遺物

第51図は、重機を利用して佐陀川開削時の掲土を掘削し、調査区外に撤去していた時に見つけた敲石と石皿のセットである。

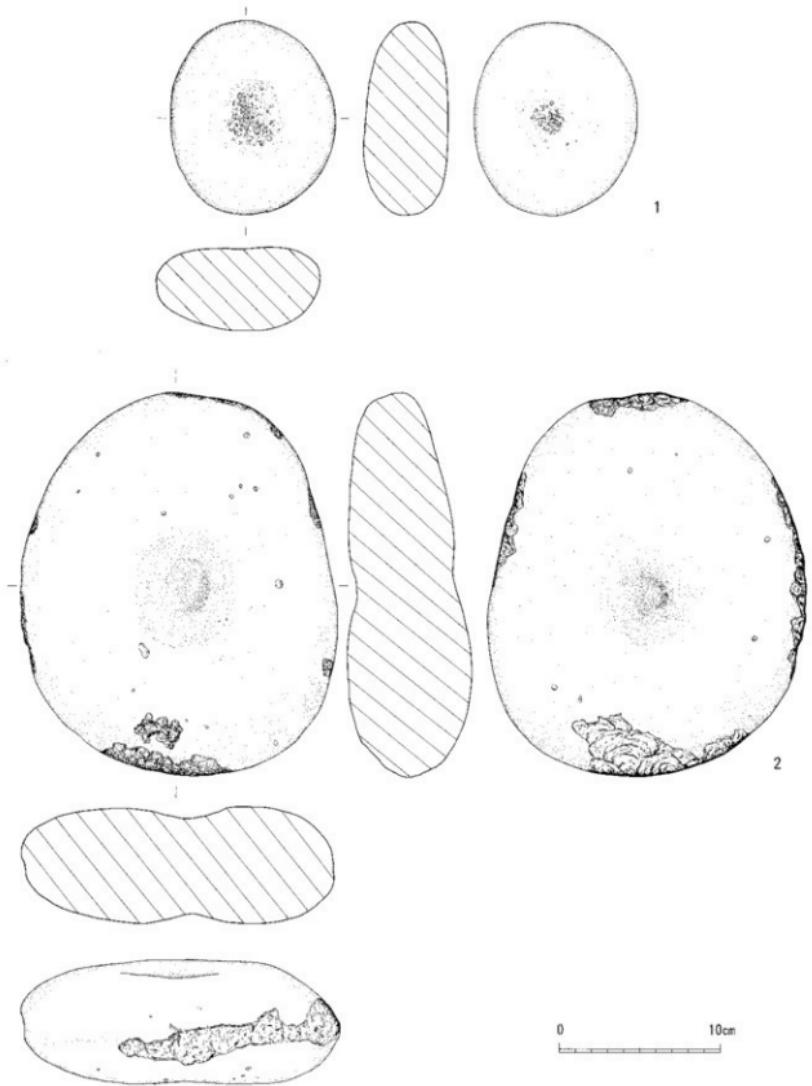
両者は整然と並んで出土したので、おそらく原位置を保っていたものと思われる。しかし、周りは揚上の山だらけで、石皿は重機の爪で30cm近く引きずられてしまっていた。急々に揚上を除去しなくてはならない状況にあり、これらを原位地にとどめての作業続行は無理と判断し、即時両者の取り上げをおこなった。

両者が出土した場所は、段SX05付近の調査区中央よりやや西寄りであった。また、最終造構面からの出土ではなかったことを記憶している。

1は敲石で、両面ともよく使い込まれて中央部がくぼんでいるが、側面は使用されなかったようである。縦12.0cm、横10.1cm、厚さ5.2cm、重量963gを測る。2は石皿で、これもまた両面ともによく



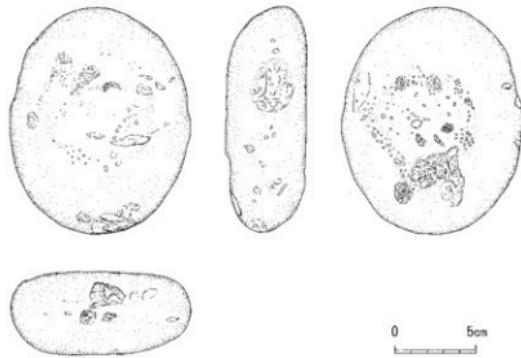
第50図 段SX07以東出土遺物実測図



第51図 重機掘削中に出土した遺物実測図

使い込まれており、中央が約1cm近くも窪んでいる。非常に重たい石皿であるが、周縁部で敲打もおこなったらしく、側面4ヶ所にその使用痕が残っている。縦23.8cm、横19.6cm、厚さ7.6cm、重量5,220gを測る。

第52図は廃土の「」からみつけた敲石である。両面とも中央に使用痕が残るほか、周縁部にも敲打の痕跡が残っているが、あまり長期間は使用されなかつたようである。この敲石に関しては、ところどころに漆状の付着物（成分分析はおこなっていない）が付いていることを特記しておきたい。縦14.0cm、横11.2cm、厚さ5.2cm、重量1,050gを測る。



第52図 出土地点不明石器実測図

(5) 小結

調査区全面で弥生時代中期末から後期全般にわたる遺構を検出した。

中棚木の円形竪穴住居跡2棟、後期末の隅丸方形竪穴住居跡2棟と加工段を伴う掘立柱建物跡1棟、その他D区斜面で検出したピット群からは多くの掘立柱建物跡の存在が推定された。

これらの遺構群の中で、特に興味深いものは竪穴住居跡SI02であった。土器類が、生活していた時そのままのような状況で出土したのである。また、土器と焼土の位置関係から、煮炊場と食器収納場所を知ることができた。この遺構は、当時の竪穴住居内で使用される土器組成を知る上でも重要な資料と成り得るだろう。

注(1) 松本岩雄「7. 山雲・鶴岐地域の弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－」正岡睦夫・松本岩雄編 1992年

以下、松本編作とは全てこれをさす。

第3節 中世の遺構と遺物

調査区は大勝間山城の南西端である。

山城跡という先入観をもって調査区（第53図）を見ると、崖1や崖2はまさに切岸で、A区とC区はいかにも曲輪の様相を呈している。考古学的手法を用いて、これらの実態を具体的に検証することを目的としたが、トレンチA、B（第9図）で上層を観察しても山城築城に関連する土層は確認できず、土層面からのアプローチは失敗した。以下では全面調査の成果について調査区ごとに記す。

(1) 調査成果

① A区

若干の傾斜はあるが、調査区外も含めると広い平坦面になっている。北端の最高所に立つと、芦ヶ城方面はもちろん、立木さえ無ければ東方以外の3方向はとても見晴らしが良い。崖1が切岸として防御の役割を果たし、曲輪と考えて間違いないと思われる。

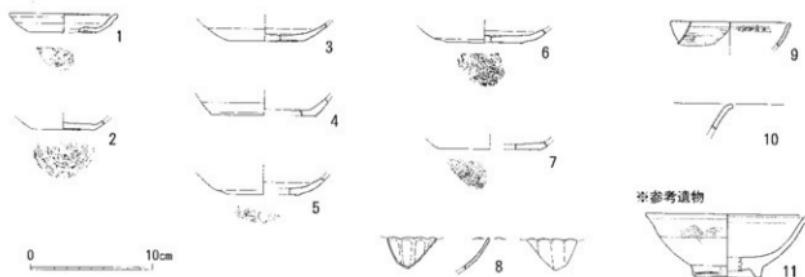
柵や建物等の遺構が検出されず遺構面からの積極的な根拠には欠けるが、南寄りの緩傾斜地から焚火の跡を検出したほか、表土直下の浅いレベルから土師質土器の皿破片多数や中国製磁器の破片が出土した（第53・54図）。このことは、A区が重要な曲輪の1つであったことを示す根拠となり得るであろう。

第53図1～7は土師質土器の皿である。底部は全て回転糸切りで、1は口径8.9cm（推）、底径5.9cm（推）、器高1.5cmを測る。2～7は底部のみの残存であるが、復原底径から中世の皿や碗と考えられる。8～10は16世紀の中国製磁器で、8は白磁の輪花皿、9は青花の碗で口径9.8cm（推）を測る。10は青磁の碗である。

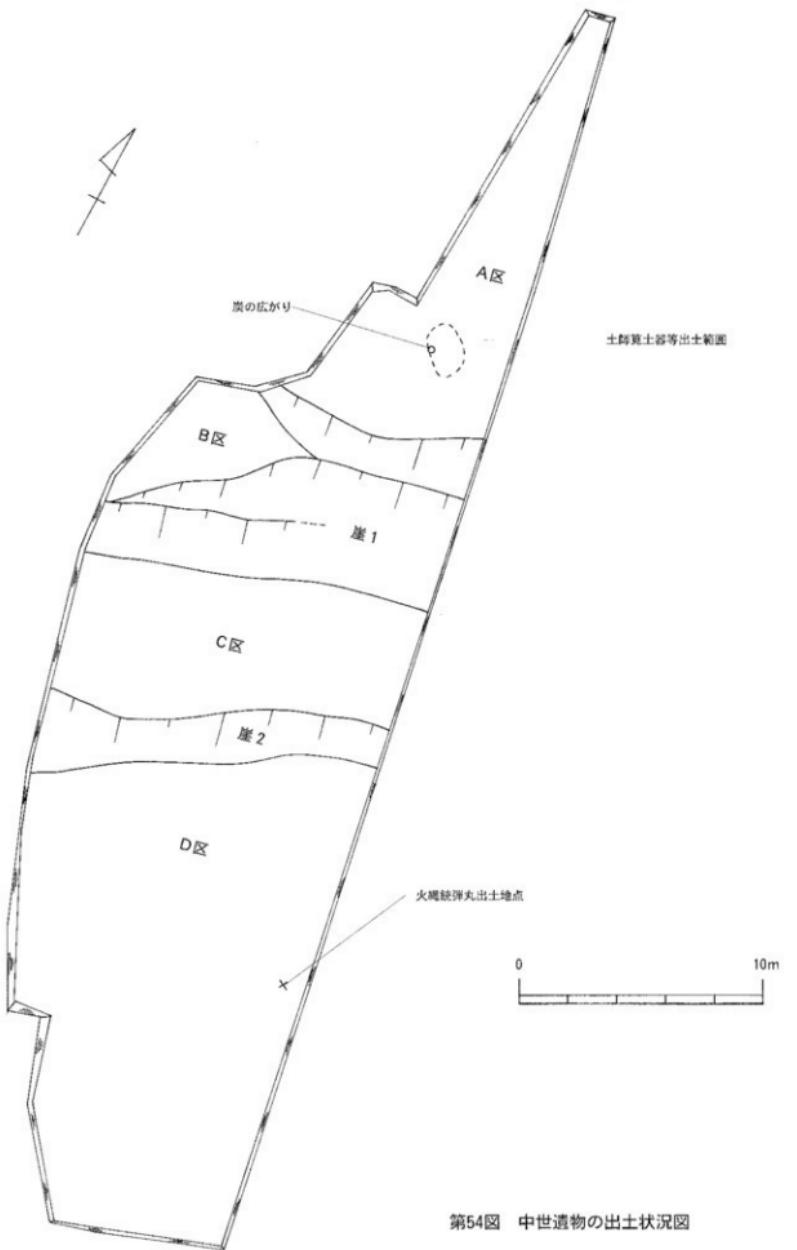
参考資料の11は調査区外から出土した、16世紀半ばの中国製の青磁碗である¹¹。外面には櫛状工具で波状文が描かれ、水色に近い青磁釉がかけられている。高台部は露胎で淡褐色を呈している。口径13.4（推）、底径5.6cm（推）、器高5.2cmを測る。

② B区

傾斜がきついため、曲輪であった可能性は低い。中世の遺構、遺物は出土しなかった。



第53図 中世遺物実測図



第54図 中世遺物の出土状況図

③C区

南北幅5~6mを測り、東西は調査区外に延びる平坦地である。

曲輪と考えたいが、山城に関連する遺構、遺物が出土していないため、積極的根拠に欠ける。

南の崖2は切岸のように見えるが、トレンチAで土層を観察したところ、崖2の下の平坦面つまりD区の北端の地山直上から佐陀川開削時の掲土が置かれていたことより、調査区東半分は江戸時代に採土され削られた崖である可能性が高い。もちろん、もともと切岸があったところを整地して掲土置場とすれば作業量が少なくてすみ、中世に切岸が存在しなかったとも言い切れない。

④D区

ほぼ全面が江戸時代の佐陀川開削時の掲土置場とされた場所である。傾斜地なので曲輪ではないだろう。弥生時代の遺物包含層上面から掘られた溝SD12(第31図)は、埋土にしまりが無かったことから中世の通路等の遺構かもしれない。

遺物は、弥生時代の遺物包含層にやや埋もれたレベルから、火縄銃の弾丸(第55図)1点が出土した。鉛製で灰白色の鋒が出ていて、球形を呈し、直径1.2cm、重量8.13gを測る。

⑤崖1

崖の高さは約3mあり、ここを正面から登ることは困難である。

前記したとおり、弥生時代後期にはこの崖が既に存在していたと思われるが、中世の築城に際してA区の曲輪の切岸として整備された可能性が高い。たとえ整備していくなくても、天然の切岸となり得たであろう。

⑥崖2

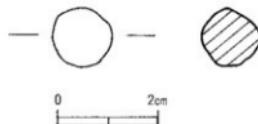
崖の高さは約1mで、調査区外の東西両方向に延びている。

調査区東側半分は、③で記したとおり近世の佐陀川開削時に削られた崖である可能性が高い。西側半分は緩やかな階段状の斜面で弥生時代の遺構が残っており、中世の山城遺構である可能性は低いと思われる。

(2) 小結

大勝間山城では土地造成をして曲輪を造った痕跡が無く、曲輪らしい地形を確認しても土層の面からその真偽を問うことができなかった。ただ、焚火跡や土師質土器、中國製の磁器類が出土したことからA区は重要な曲輪の内の1つであり、崖1は切岸の役割を果たしたと考えられる。しかし、遺構や遺物が出土していないC区については、曲輪の可能性を残しながらもその是非を実証することはできなかった。

注(1) 鶴齧山遺跡他発掘調査時の出土品



第55図 火縄銃の弾丸実測図

第4節 近世の遺構と遺物

トレンチ A を掘った段階で、崖 2 から D 区にかけて、ところどころに山土を挟む黒色粘質土の厚い客土層を確認した（第9図）。

(1) 調査成果

黒色粘質土を中心とする客土層は低湿地の泥土で、運河佐陀川の揚土である。

今回の調査では、揚土を置く前に上地造成をおこなっていることがわかった。置場の山際をカットしてわずかな平坦面を造りだし、下端に沿って幅30~40cm、深さ 3 cm程度、断面「U」字形の浅い溝が掘られている。調査区の東側半分は崖 2 が地山カットで、西側半分は弧を描いて南方に下がる低いカットがおこなわれている。そこから下の斜面では当時の表土層が見られなかったことから、少なくとも表土までは全て除去して整地したようである。

佐陀川の揚土は、廃土置場として造成された場所のみに置かれていた（第57図）。しかし、廃土置場の範囲は D 区のみに収まるものではなく、D 区の西側調査区外にも若干置かれているほか、東側の調査区外に広範囲に広がっていると思われる。

佐陀川の揚土層の厚さは、地形が高い北方で 0.5m 強、調査区南端で 1.5m を測る。揚土層は上から下まで一様ではなく、下方ほど黒色粘質土の割合が高く、上方では山上層の割合が高めになっていた。揚土層の上には、揚土層と近似した約 40cm 厚さの層が見られるが、空気を多く含んで締まりが無いことから、揚土層が二次的に移動された客土層と考えられる。

黒色粘質土を中心とする揚土層は莫大な体積があったうえ、調査期間が限られていたので、立会して重機で除去をおこなった。揚土層の中からは土器片 4 点が出土した（第56図）。

第57図 1 は弥生時代の甕口縁部、2 は須恵器の坏身、3 は縄文土器の底部、4 は弥生土器もしくは土師器の底部である。数は少ないが幅広い時期の遺物が出土した。

江戸時代の遺物は出土しなかった。

(2) 小結

運河佐陀川が開削された時、調査区西側の泥沢地は軟弱な地盤であったため、川道を掘っても崩壊を繰り返したという「鶴瀬の難工事」伝承が残っている⁽¹⁾。

ここでは掘り揚げた廃土の置場を検出した。揚土を置く前に、まず山を削って表土を除去し、用地造成をおこなっていたのである。その規模は調査区内に収まるものでは無く、東西の調査区外にも広がっている。黒色粘質土（揚土）のところどころに山土を挟んでいるのは、湿地の泥土を単に置くだけでは流れ出するため、置土を安定させるための工夫と考えられる。

運河そのものだけではなく、大量の廃土処理にも苦心した様がうかがえる。

注(1)『鳥根県旧藩美蹟』奥原福一・鳥根県内務部 明治45年(1912)



第56図 佐陀川揚土内出土遺物実測図



第57図 佐陀川開削時の堆土範囲

第4章 結語

大勝間山城跡の本調査区は、弥生時代と中世と近世の三時代の複合遺跡であった。

最も下層の遺跡は弥生時代集落跡である。

南面した斜面で日当たりが良く、海から吹く北風は背後の丘陵が阻んでくれる。付近には佐太海水や恵養陂の前身にあたる汽水湖があるほか、西には杏川が流れている。また、初期稻作に都合のいい低湿地にも恵まれていた。居住するにはさぞかし快適な場所ではなかったかと思う。

遺構は、竪穴住居跡4棟、加工段を伴う掘立柱建物跡1棟、1×2間の掘立柱建物跡1棟分を確認したが、溝や段状造構、多数のピットを検出したので、掘立柱建物の棟数はもっと多かったに違いない。そして、東側の調査区外にも遺構は続いている。

遺構の検出密度は高いが、伴出遺物より造構間には中期後半から後期末までの時期幅が存在することがわかった。

丘陵中腹（C区）で検出した円形の竪穴住居跡2棟が中期末の造構で最も古い。この2棟の円形竪穴住居は同時期に存在したものではなく、ほぼ同じ場所で造り替えられたものである。新しい住居が古い住居よりもレベルが浅くなるという珍しいケースであった。

後期末には丘陵の上方（A区）と中腹（C区）に丸卵方形の竪穴住居が造られている。上方の竪穴住居跡は、中央ピットの深さが床面から55cmと深く、北辺の排水溝から中央ピットに水を導くような溝が掘られていた。中央ピットと中央ピットに通じる溝は2段掘りになっており、普段は蓋をして使用されていた可能性が考えられる。中腹（C区）の竪穴住居跡では、生活していた時そのままのような状況で土器が出土した。当時の竪穴住居内で使用された土器組成をみると、良い資料となるだろう。下方（D区）の加工段を伴う掘立柱建物跡は、この2棟とほぼ同時期に存在したと考えられる。中腹より下方（D区）ではたくさんのピットを検出した。後期全般の土器が出土したので、後期を通して人々が居住していたものと思われる。

中腹（C区）の1×2間の掘立柱建物跡は、弥生時代後期末の竪穴住居跡が完全に埋没した面で平面プランを検出した。弥生時代後期末より新しい建物跡であるが、遺物が出土していないので時期は不明である。ただ、埋上が非常にしまっていたので、大勝間山城に関連する施設ではないと考える。

弥生時代後期末以降、人々はこの地での居住をやめてしまう。

大勝間山の山頂平坦面では須恵器片を伴う土壤墓が検出されているので¹⁰、大勝間山は墓地として位置づけられるようになったかもしれない。

中世に入ると大勝間山には大勝間山城が築城された。

大勝間山城は「朝山家系図」¹¹『雲陽誌』¹²によれば、尼子氏から佐陀庄島根分の地頭を任せられた福頼内膳正が築城した山城と伝えられている。彼の前の地頭が永正十七年（1520年）に朝山氏によって滅ぼされたというから、築城時期はそれ以降である。この内容を信じるならば、大勝間山城は中世山城の中では比較的新しい地頭が築いた山城である。

大勝間山の頂部には広い平坦面があり、ところどころに曲輪のような平坦面を散見するが、大勝間山は東側の半分近くを中学校の敷地等で尖っている。また、残されたところも植林のための雑壇造成の影響などを受けており、表面観察から縄張図を作成することは逆に危険な行為と考える。発掘調査の成果から山城の復原を考えていきたい。

今回の発掘調査では、頂部の平坦面から南方に派生する緩傾斜地（A区）において、焚火跡と中国

製磁器の碗や土師質土器の皿破片が散乱している状況を確認した。この緩傾斜地には人為的な造成跡や施設の跡は見られなかったが、南には比高3mの切岸があり曲輪の1つと考えられる。ここからは芦山城や南方に向けての見晴らしが非常に良い。この場所で焚火をして土師質土器の皿で酒を飲みながら佐陀方面を監視していたのは誰だったのであろうか。

荒隈城に拠っていた毛利氏が宮田城を落とすと、尼子勝久は隱岐島へ逃げるが、再興を賭けて再び真山城を占拠する。この時、軍記物『雲陽軍実記』¹⁰によれば、大勝間山城は鳶が巣城に本陣を置いた毛利方に占拠されていたという。大勝間山城は、真山に立て籬もる尼子方が大芦や御津、恵曇といった日本海側の港を通じて兵糧を運ぶ道を断つには絶好の立地にある。大勝間山城は真山城の向城として毛利方が睨みをきかせていたのである。

尼子方も大勝間山城を落とそうと、三刀屋藏人に八百余騎を添えて攻め込ませたが、三刀屋藏人は脇腹を鉄砲に撃ちぬかれて戦死した。尼子方はその後もしつこく攻め入り、吉川元春が加勢を向いたにもかかわらず、大勝間山城に拠る毛利方は鳶が巣城へ逃げかえったという。『雲陽軍実記』は尼子方の家臣、河本大八が書いた軍記物であるから、資料としては非常に信憑性が低いのであるが、わざわざ大勝間山城を「勝間城」として登場させていることを見逃すこともないであろう。実際、A区下方のD区斜面から火縄銃の弾丸が1点出土した。この弾丸は運河佐陀川の揚土層の下の屑から出土したので、1788年以前に落とされたことは確実であり、上記した尼子復興戦に関連する遺物である可能性は十分に考えられる。

近世、江戸時代に入ると、松江藩の藩主堀尾氏は居城を宮田城から現在の松江城がある場所へ移した。近世城郭を目指し、城の周りの低湿地を造成して城下町を造り上げたことはよく知られている。ところが、大雨が降った後の宍道湖の水は大橋川だけでは排水が追いつかず、城下町はもとより宍道湖周辺の田畠、穀倉出雲平野までが何度もなく洪水の被害にあっている。

記録によると、寛永十年（1633年）、寛永十二年（1635年）、寛永十六年（1639年）、延宝二年（1674年）、元禄十五年（1702年）、享保六年（1721年）、享保七年（1722年）、宝曆九年（1759年）、天明二年（1782年）、天明三年（1783年）、天明四年（1784年）に洪水¹¹があり、天明三年には所謂大明の大飢饉で米価が暴騰して百姓一揆がおこっている。

このような状況を開拓するため、松江藩士清原太兵衛は宍道湖の排水路を人工的に造る計画を立てた。佐太水海から一路北上して大勝間山の西付近で流路を西に変えて志墨に抜ける、全長12km、幅25mの運河佐陀川の開削である。運河開削工事は天明五年三月に着工され、天明七年九月に竣工し、天明八年一月に川開きに至ったとのことである¹²。

運河佐陀川工事の中で最も難工事を極めたというのが潟ノ内と鶴灘で、「潟ノ内は泥土深くて、土塊しまらず、又鶴灘の地は終日苦辛して掘り上げた川路も、一夜の内に崩壊する…」¹³と表現されている。この鶴灘こそが佐太講武目塚から大勝間山西側にかけての地域にあたる。

難工事を裏付ける遺跡は、佐太講武目塚とバクチ谷のトレント調査で確認されている¹⁴。佐太講武目塚の現在史跡指定地となっている場所は、実は佐陀川の揚土層であったという。また、バクチ谷調査地は運河佐陀川から直線距離にして約100m東方、標高13.8mの谷の奥であるが、地表から深さ2mまで揚土層が検出されている。調査担当者は、土層断面で旧地表が確認できないことから用地造成の可能性があり、同じバクチ谷でも平野部に近い調査区では揚土が認められないことから佐陀川の掘削事業は非常に計画性のある工事であったと指摘している。

大勝間山城跡の調査では、佐陀川の揚土置場の造成状況を土層断面と遺構の両面から確認すること

ができた。

揚土置場は、標高12～13mの地山をカットしてわずかな平坦面を造り出し、下端に沿って浅い溝状の窪みを設け、その下の斜面の表土は全て除去されていた。そして、その上に揚土が置かれていたのである。平成18年度の鶴瀬山遺跡他発掘調査の一環として、同丘陵の東側で大勝間山城跡のトレント調査を実施した時も同様の揚土層を検出した⁽³⁾。確認したわけではないが、位置関係から今回検出した揚土層と一緒に廃土遺構と考えて間違いないであろう。復原すると、少なくとも直径約30mの半円形の範囲で土地造成がおこなわれ、その後に揚土が置かれていることになる（第57図）。

おそらくバクチ谷でも同様の工事がおこなわれているだろう。

鶴瀬の難工事の一端を、遺構として確認することができたのは今回の調査が初めてである。川道掘削もさることながら、低湿地の泥土を標高10数メートルの斜面まで運び上げる廃土処理も大変な労力が必要であったに違いない。改めて清原太兵衛の偉業に敬服する。

注(1)『佐太講武目塚発掘調査報告書』島根県鹿島町教育委員会 1993年

(2)『朝山家系図』『八束郡誌』奥原福市編 大正十五年（1926）

(3)『雲陽誌』黒澤長尚 享保二年（1717）

(4)『雲陽軍実記』河本大八郎政 天正十八年（1587）

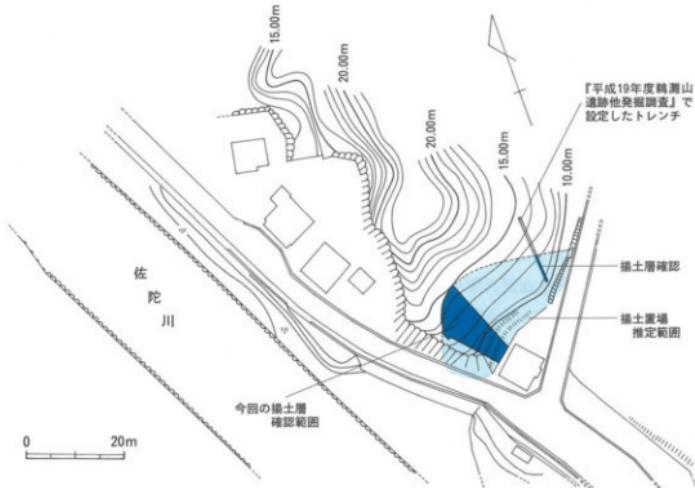
(5)『斐伊川史』長瀬定市編・斐伊川史刊行会 昭和25年（1960）

(6)『清原太兵衛』清原太兵衛頌徳會 昭和3年（1628）

(7)『島根県旧藩美蹟』奥原福一・島根県内務部 明治45年（1912）

(8)『佐太講武目塚発掘調査報告書』島根県鹿島町教育委員会 1993年

(9)『鶴瀬山遺跡他発掘調査報告書』松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 2007年



第58図 佐陀川揚土置場の推定範囲

勝岡山の歴史を漫画にしてみました

No. 1

弥生時代の勝岡山



戦国時代の勝岡山



江戸時代の勝岡山



(造説をもとに描いた、イメージです)

平成19年5月26日「大勝岡山城跡発掘調査現地説明会資料」より

遺物観察表(土器)

番号	種類	器種	法線(cm)	性 土	地成	内 面	調査等	既往状況	備考
1-1	陶器	瓶	底径: 5.4(推)	灰白	灰白色を多少含む	内部: 浅灰色 外部: 黒褐色～墨褐色 断面: 淡褐色	内面: 鮎化 外面: 黒いハケメ、次に火を受けている 底部: ハケメ	図示部約1/4強	外側底面部に擦付
1-2	陶器	土器	底径: 8.9	灰	2mm以下の良石、選別、水洗(?)を含む。破損部に5mm以上の灰色の粘土1ヶ合む。	内部: 黒褐色、墨褐色 外部: 明赤褐色、灰褐色、墨褐色	内面: 鮎化のため不明	小片(7×3.5cm大)	
1-3	陶器	瓶	底径: 9.8	やや灰	2mm以下の石灰、長石、黄鐵(?)多く含む	内部: 黑褐色、に赤い内 外部: に赤い青褐色、墨褐色 底面: ナゲ	内面: 鮎化 外面: マキナ 底面: ナゲ	小片(7×6cm大)	
12-1	陶生土器	甕	口径: 20.1 底径: 16.3(推)	灰	2mm以下の長石、石英多く含む	内部: 黑褐色、墨褐色 外部: 黑褐色、墨褐色 断面: 墨褐色	内面: コロナデ、一部ヘタケスリ 外面: コロナデ	小片(9×4.5cm大)	
12-2	陶生土器	小甕	加厚: 7.2(推)	灰	1mm以下の長石の 砂利多く含む	内部: 赤褐色 外部: 黑褐色 断面: 墨褐色	内面: 鮎化 外面: ナゲ	底部から両にかけて	
14-1	陶生土器	甕	口径: 16.4	灰	3mm以下の長石、不規則な砂利多く含む	内部: 改良色 外部: 黑褐色、墨褐色	内面: ナゲ 外用: 鮎化、口沿部には複数又文様	小片(5×3cm大)	
14-2	陶生土器	甕	口径: 14.4(推)	灰	2mm以下の長石、石英多く含む	内部: 改良色、墨褐色 外部: 黑褐色、墨褐色 底面: 墨褐色	内面: 鮎化のため不明	小片(4×3cm大)	
14-3	上縁器	(把手)	底径: 7.1(推) 厚さ: 1.8	灰	1mm以下の長石、石英多く含む	内部: 黑褐色、灰褐色、黑色 外用: 灰褐色、灰褐色、黑色 (底)	内面: ナゲハケメ	把手としてほぼ方形	
14-4	陶生土器	(底部)	底径: 9.8(推)	灰	3mm以下の石灰、長石多く含む	内部: 黑褐色 外部: 黑褐色、褐色 底面: ナゲ	内面: 鮎化 外用: ナゲ 底面: ナゲ	小片(4.5×3.5cm大)	
14-5	陶生土器	(底部)	底径: 11.0(推)	灰	2mm以上の長石多く含む	内部: 黑褐色 外部: 黑褐色 底面: 墨褐色	内面: ナゲ 外用: ナゲ 底面: ナゲ	小片(5.5×3cm大)	
17-1	陶生土器	甕	口径: 16.5(推) 底径: 13.4(推)	灰	内面: 黑褐色 外用: 改良色 底面: 墨褐色	内面: 鮎化 外用: 鮎化	口沿部・鋸歯にかけた小片		
21-1	陶生土器	甕	口径: 13.2(推)	灰	石英、長石を微量に含む	内面: 改良色 外用: 黑褐色、墨褐色 底面: 墨褐色	内面: ハケメコナデ、地感鮎化 外用: 口縁鮎化、底部ハケメ	3cm×4cm程度	
21-2	陶生土器	甕	口径: 14.7(推) 底径: 13.6(推)	灰	石英、長石を微量に含む	内面: 黑褐色 外用: 黑褐色 底面: 墓褐色	内面: 鮎化、類似底下ケズリ 外用: コロナデ	4cm×6cm程度	
21-3	陶生土器	甕	口径: 16.9(推) 底径: 15.5(推)	灰	砂粒少混合な	内面: 改良色 外用: 淡褐色～墨褐色 底面: 墓褐色	内面: 鮎化、底部ドケズリ 外用: コロナデ	図示部約1/4	
21-4	陶生土器	甕	口径: 16.3(推) 底径: 12.2(推)	灰	少量の砂粒を含む	内面: 改良色 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色	内面: 鮎化 外用: 鮎化	図示部約1/4程度	
21-5	陶生土器	甕	口径: 16.3(推) 底径: 15.5(推) 周長: 34(推)	灰	内面: に赤い緑色 外用: 黑褐色 底面: 墓褐色	内面: 鮎化、ケズリ 外用: 駆逐上方ナガ、駆逐下方ハケメ	正面に出たしたが縫合不可 外用に掛出する箇所有り		
21-6	陶生土器	鉢形器	口径: 12.2(推) 底径: 21.5(推) 高さ: 19.5	灰	0.5mm以下の長石を含む	内面: 改良色 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色	内面: コロナデ、縁台部にヘタケスリ 外用: コロナデ	縁台部隠部は2/3、 表面部は1/2	
21-7	陶生土器	鉢形器	口径: 12.0(推) 底径: 22.0(推) 高さ: 19.5	灰	内面: 改良色 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色	内面: 鮎化 外用: 鮎化	表面部2/3、縁台部 3/4		
21-8	陶生土器	鉢形器	口径: 11.8(推)	灰	長石の微細粒を含む	内面: 刺毛地 外用: 墓褐色	表面部の凹部はなく、 局部部分は完全形、裏 面部分は構成している		
21-9	陶生土器	鉢形器	口径: 10.0(推)	灰	長石の微細粒を含む	内面: 改良色 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色	表面のみ1/3程度残 底面		
21-10	陶生土器	高杯	底径: 14.8	灰	長石の微細粒を含む	内面: 刺毛地 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色	内面: ケズリ、コロナデ、ハケメ底ヨコ ナゲ	相部のみ残在	
21-11	陶生土器	高杯	口径: 12.7(推) 底径: 13.8 高さ: 35.2	灰	長石の微細粒を含む	内面: 墓褐色 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色	内面: ハメテヨココロナデ 内面: コロナデ、絞り後ケズリ、ヘタケ ズリヨコナデ	表面はほぼ圆形、根 元部は1/2	
21-12	陶生土器	高杯	口径: 14.7 底径: 17.0	灰	長石の微細粒を含む	内面: 墓褐色 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色	内面: 鮎化、縁部は段り窪、ハケメ底ヨコ ナゲ	相部は1/3程度しか 残存しないが他には 無元形	
21-13	陶生土器	高杯	口径: 5.6 (推測)	灰	良石の微細粒を若干含む	内面: 墓褐色 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色	内面: 脂肪は段り窪、ハケメのみ		
21-14	陶生土器	小甕	口径: 6.5 底径: 5.6 高さ: 6.7	灰	良石の微細粒を若干含む	内面: 墓褐色 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色	内面: 鮎化、縁部は段り窪、ハケメし く段り上げ等に被納		
22-1	陶生土器	甕	口径: 11.0(推) 底径: 10.2(推)	灰	1mm以下の長石の 砂粒を含む	内面: 墓褐色 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色	内面: 鮎化 外用: 墓褐色にて縁の凹部 内面: 墓褐色 外用: 墓褐色	縁部から両にかけて の小片	
23-2	陶生土器	甕	底径: 21.3(推)	灰	内面: 墓褐色の間に黒色	内面: ハケメ 外用: 墓褐色	内面は底部にかけた 小片		
23-3	陶生土器	(底部)	底径: 6.3(推)	灰	1mm以下の長石の 砂粒を多く含む	内面: 墓褐色 外用: 墓褐色 底面: 墓褐色で黒色じる	底面から脇部にかけた 小片 内面は底部にかけた 小片		

※既往歴の(推)とは歴史的資料を示す。

番号	種類	計測	寸法(cm)	構造	地盤	色調	汚染等	保存状況	備考
25-1	寄生土器	直 (直筒)		長い歯をわずかに含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 黒褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 黑褐色	内面: 水化 外面: 水化 底面: 3点の凹痕	河水部が8cm程度	
26-2	寄生土器	直 (直筒)		直筒、長い歯を少し含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 黑褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 黑褐色	内面: ナチュラル 外面: ハケメ、面部は3点以上の凹痕	器底部が3cm程度	
25-3	寄生土器	直 (直筒)		1mm前後の石英、長石を多く含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 黑褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 黑褐色	内面: ナチュラル 外面: ハケメ、面部は3点以上の凹痕	器底部が6cm程度	
25-4	寄生土器	直 (直筒)		1mm前後の石英、長石を多く含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 黑褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 黑褐色	内面: ナチュラル 外面: ハケメ、面部は3点以上の凹痕	器底部が1/6弱	
25-5	寄生土器	直 (直筒)	口径: 18.0(幅) 底径: 16.0(幅)	直筒	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 黑褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 黑褐色	内面: 口縁にナチュラル 外面: ハケメ、底面に4条の凹痕 底面: 4点の凹痕	口縁部に2点の凹痕にかけた 底面に2点の凹痕	
25-6	寄生土器	直 (直筒)	口径: 16.0(幅) 底径: 14.0(幅)	直筒少量込み	内面: 棕色 外面: 淡褐色 底面: 棕色	内面: 棕色 外面: 淡褐色 底面: 棕色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル、口縁部に5点の凹痕、運 送用の穴へ擦れ	口縁部に5点の凹痕にかけた 底面が約1/4弱程度	
25-7	寄生土器	直 (直筒)	口径: 16.0(幅) 底径: 15.2(幅)	1mm程度の長石の 砂粒を含む	内面: 淡褐色～濃灰色 外面: 淡褐色～濃灰色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色～濃灰色 外面: 淡褐色～濃灰色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル、口縁部に3点の凹痕	器底部が約1/3	
25-8	寄生土器	直 (直筒)	口径: 15.4(幅) 底径: 14.1(幅)	1mm前後の石英、 長石を多く含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル、底面に5点の凹痕、運 送用の穴へ擦れ	口縁部に約1/3弱程度	
25-9	寄生土器	直 (直筒)		微量の小石を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル、口縁部に2点の凹痕	小片(2~3cm)	口縁部の外 面に少し擦付 り
25-10	寄生土器	直 (直筒)		微量の小石を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: 淡褐色に1点凹痕、水化	小片(3~5cm)	
25-11	寄生土器	直 (直筒)		微量の砂粒を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: 口縁部に2点凹痕、水化	小片(3~5cm)	
25-12	寄生土器	直 (直筒)		微量の粒石を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル、口縁部に1点凹痕	小片(4~8cm)	
25-13	寄生土器	直 (直筒)		微量の粒石を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル、口縁部に3点以上の凹痕、運 送用の穴へ擦れ	小片(5~7cm)	
25-14	寄生土器	直 (直筒)	口径: 11.8(幅) 底径: 11.8(幅)	石英、長石を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 窓型 外面: 淡褐色 底面: 5点の凹痕、運 送用の穴へ擦れ	脚部下端分から約1/5弱程度	
25-15	寄生土器	直 (直筒)	口径: 13.6(幅) 底径: 13.6(幅)	1mmの小石の 砂粒を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 水化 外面: 水化	器底部が約1/5弱程度	内面に火を受けて いる
25-16	寄生土器	直 (直筒)	口径: 6.6(幅) 底径: 6.6(幅)	石英、1mmの小石 を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 水化 外面: 水化	器底部が約1/3弱程度	内面に火を受けて いる
25-17	寄生土器	直 (直筒)	口径: 8.4(幅) 底径: 8.4(幅)	颗粒の粒石を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: 水化	底面が約1/3弱程度	内面に火を受けて いる
25-18	寄生土器	直 (直筒)	口径: 6.8(幅) 底径: 6.8(幅)	1mm程度の長石の 砂粒をよく含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色～濃灰色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色～濃灰色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル、ハケメ	底面が約1/3	
25-19	寄生土器	直 (直筒)	口径: 6.6(幅) 底径: 6.6(幅)	1mmの石英、石 粒石を多く含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: 水化	器底部が約1/4程度	
25-20	寄生土器	直 (直筒)	口径: 8.0(幅) 底径: 8.0(幅)	砂粒少量込み	内面: 淡褐色 外面: ない(標準) 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色、ヘラミガキ 底面: 淡褐色	内面: 水化 外面: 水化	器底部が約1/6程度	外側、底部に 擦付
25-21	寄生土器	直 (直筒)	口径: 6.2(幅) 底径: 6.2(幅)	1mm以下の長石の 砂粒を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル	器底部が約1/2弱程度	器底部が約1/2弱程度
25-22	寄生土器	直 (直筒)	口径: 6.6(幅) 底径: 6.6(幅)	万葉1.6m少底凸 起	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: なし	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: なし	内面: 水化 外面: 水化	底面が約1/3弱程度	内面に火を受けて いる
25-23	寄生土器	直 (直筒)	口径: 14.1(幅) 底径: 12.6(幅)	石英0.5mm少底凸 起	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: なし	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: なし	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル	器底部が約1/3弱程度	内面に火を受けて いる
25-24	寄生土器	直 (直筒)	口径: 14.5(幅) 底径: 14.5(幅)	1mm以下の長石の 砂粒をよく含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: なし	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: なし	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル	器底部が約1/4程度	内面に火を受けて いる
25-25	寄生土器	直 (直筒)	口径: 18.0(幅) 底径: 17.0(幅)	砂粒少々含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル、ヘラミガキ	器底部が約1/6程度	
25-26	寄生土器	直 (直筒)	口径: 12.0(幅) 底径: 9.0(幅)	1mm程度の長石の 砂粒を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル	器底部が約1/4程度	山陰部に擦付
25-27	寄生土器	直 (直筒)	口径: 11.0(幅) 底径: 9.7(幅)	1mm程度の長石の 砂粒を多く含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル	器底部が約1/4程度	山陰部に擦付
25-28	寄生土器	直 (直筒)	口径: 12.7(幅) 底径: 10.5(幅)	普通	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル	器底部が約1/4程度	器底部に擦付
25-29	寄生土器	直 (直筒)	口径: 13.0(幅) 底径: 13.0(幅)	1mm前後の長石の 砂粒を含む	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル	器底部が約1/5程度	器底部に擦付
25-30	寄生土器	直 (直筒)	口径: 13.0(幅) 底径: 13.0(幅)	砂粒最大部 16.3	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: 淡褐色 外面: 淡褐色 底面: 淡褐色	内面: ナチュラル 外面: ナチュラル	器底部が約1/5程度	器底部に擦付

卓注箇所の「(標準)」は振出部定積を示す。

固有号	地質	名稱	深度(m)	施 工	地 色	調 査	基準	其 他	説 明	備考
34-7 ニホン土層 礁	口径: 14.0(幅) 掘深: 12.0(幅)			1m以降の長石を含む 泥岩	内面: 青灰色 外面: 灰青色の土性岩 断面: 黄褐色～灰褐色	内面: ヨコナダ、ハッカズリ 外面: ヨコナダ 内面: 木板等にまき名の凹痕	下部から底部にかけての小片	口縫から外側に傾く石		
34-8 ニホン土層 費	口径: 11.0(幅) 掘深: 11.0(幅)			1m以降の長石の 砂を含む	内面: 灰青色 外面: 灰色～褐色 断面: 灰褐色	内面: コナダ、ハッカズリ 外面: タゲ、白縫部には4条の断面	口縫から底部にかけて約1/4			
34-9 ニホン土層 壁	口径: 15.0(幅) 掘深: 15.0(幅)			長石の長砂を含む	内面: 灰青色 外面: 灰色～褐色	内面: ヨコナダ、ヘラカズリ 外面: コナダ、口縫部には3条の断面	口縫から底部にかけて約1/4			
34-10 ニホン土層 礁	口径: 13.0(幅) 掘深: 13.0(幅)			1m以降の長石の 砂を含む	内面: 灰青色～灰黑色 外面: 灰青色 断面: 黄褐色	内面: ヨコナダ、ハッカズリ 外面: コナダ 内面: 变形化が著しく不明瞭だが3.4 cm	口縫から底部にかけて約1/4	變形に次第的な大きさを受けている		
34-11 ニホン土層 礁	口径: 17.0(幅) 掘深: 14.0(幅)			1m以降の長石の 砂を多く含む	内面: 灰青色 外面: 灰色～褐色 断面: 黄褐色	内面: ヨコナダ、ハッカズリ 外面: コナダ 内面: 口縫部に3条の凹痕	口縫から底部にかけて約1/4			
34-12 ニホン土層 費	口径: 17.5(幅) 掘深: 14.0(幅)			1m以降の長石の 砂を少し含む	内面: 灰青色 外面: 灰色 断面: 灰褐色	内面: ヨコナダ 外面: コナダ 内面: 亂れが3～5条の凹痕	口縫から底部にかけて約1/4			
34-13 ニホン土層 壁	口径: 16.0(幅) 掘深: 13.0(幅)			1m以降の長石の 砂を含む	内面: 灰色 外面: 灰色～灰褐色 断面: 灰褐色	内面: コナダ、ヘラカズリ 外面: コナダ、1.4m底部に3条の凹痕	口縫から底部にかけての小片	外側に若干の剥離石		
34-14 ニホン土層 礁	口径: 18.1(幅) 掘深: 14.0(幅)			長石の長砂を含む	内面: 灰褐色 外面: 黄褐色～灰褐色 断面: 灰褐色	内面: ヨコナダ、ハッカズリ 外面: コナダ、3条の凹痕	口縫から底部にかけての小片	外側に根付石		
34-15 ニホン土層 費	口径: 20.0(幅) 掘深: 18.0(幅)			1m以降の長石の 砂を多く含む	内面: 灰青色 外面: 灰色 断面: 灰褐色	内面: ヨコナダ、タグリ 外面: ヨコナダ、口縫部に3条の凹痕	口縫部の小片			
34-16 舟川土層 礁	口径: 22.5(幅) 掘深: 19.0(幅)			1m以降の長石の 砂を多く含む	内面: 灰青色～灰褐色 外面: 灰青色～灰褐色 断面: 白灰色～米白色	内面: コナダ、タグリ 外面: コナダ、1.4m底部には3条の凹痕	口縫から底部にかけての小片	外側に根付石		
34-17 野生土層(底部)	底径: 3.2(幅)			1m以下の長石の 砂を含む	内面: 灰青色 外面: 灰色 断面: 灰褐色	内面: ハッカズリ 外面: ハッカズリ	直縫から底部にかけての小片			
34-18 野生土層 礁	口径: 1.0(幅) 掘深: 3.2(幅)			1m程度の長石の 砂を含む	内面: 灰青色 外面: 灰褐色 断面: 白灰色	内面: タグ 外面: ヨコナダ	底部の小片			
34-19 舟川土層 礁	口径: 21.5(幅) 掘深: 19.0(幅)			1m以降の長石の 砂を多く含む	内面: 灰青色 外面: 黄褐色～灰褐色 断面: 白灰色～米白色	内面: ヨコナダ 外面: ヨコナダ	口縫から底部にかけての小片	外側に根付石		
35-1 野生土層 礁	口径: 17.0(幅) 掘深: 15.0(幅)			2m以上の砂石 灰岩、白色の砂物 少量含む	内面: 灰褐色 外面: 黄褐色 断面: 灰褐色	内面: ヨコナダ 外面: ヨコナダ 内面: 3条の凹痕	直縫から底部にかけて約1/4			
35-2 野生土層 礁	口径: 17.1(幅) 掘深: 15.6(幅)			3m以下の灰岩、 石英	内面: にじみ青褐色 外面: 黄褐色	内面: ハッカズリ 外面: 3条の凹痕 内面: ヨコナダ、1.4m底部には3条の凹痕	直縫の1/4、体厚は 12.9cm	直縫全体に根付石 内面に多少剥離石		
35-3 野生土層 礁	口径: 18.2(幅) 掘深: 14.0(幅)			長石の砂岩を少額 含む	内面: 灰色 外面: 灰褐色～灰褐色 断面: 灰褐色	内面: 水化 外面: 3条の凹痕、ヨコナダ 内面: 黄褐色	直縫全体に根付石			
35-4 野生土層 礁	口径: 13.7(幅) 掘深: 12.0(幅)			砂物少量含む	内面: 淡黄褐色 外面: 黄褐色 断面: 黄褐色	内面: 水化 外面: ヨコナダ、2条の凹痕	底部の約1/6程度	直縫の外側に 直縫全体に根付石		
35-5 野生土層 (底部)	底径: 6.0(幅)			1m以下の砂物を 多く含む	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色 断面: 黄褐色	内面: タグ 外面: ヨコナダ	直縫の約1/4程度			
35-6 野生土層 礁	底径: 5.4(幅)			1.5m以下の砂物 を多く含む	内面: 淡黃色 外面: 黄褐色～淡黄色 断面: 黄褐色	内面: 水化 外面: 3条の凹痕、ヨコナダ 内面: 黄褐色	直縫から顶部にかけ ての小片			
35-7 野生土層 礁	底径: 12.7(幅)			1m以下の砂物 を多く含む	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色 断面: 黄褐色	内面: タグ 外面: ヨコナダ、水化	直縫から顶部にかけ ての小片	口縫(小片)～全体に かけ		
35-8 野生土層 礁	底径: 11.0(幅)			3m以上の砂物 を多く含む	内面: にじみ青褐色 外面: 黄褐色	内面: 水化 外面: 3条の凹痕、ヨコナダ 内面: 黄褐色	直縫の約1/4程度	直縫全体に根付石 内面に多少剥離石		
35-9 野生土層 礁	口径: 16.7(幅) 底径: 8.0			内面: 黄褐色 外面: 黄褐色	内面: 水化 外面: ヨコナダ	内面: 水化 外面: 3条の凹痕、ヨコナダ 内面: 黄褐色	直縫から顶部にかけ ての小片	直縫全体に根付石		
35-10 野生土層 礁	口径: 17.0(幅) 底径: 8.0			内面: 黄褐色 外面: 黄褐色	内面: 水化 外面: ヨコナダ、ヨコナダ	内面: タグ 外面: 水化	直縫から底部にかけての小片	直縫全体に根付石		
35-11 野生土層 礁	口径: 18.0(幅) 底径: 15.1(幅)			3.5m程度の長石 を少額含む	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色 断面: 黄褐色	内面: ヨコナダ 外面: 2條の凹痕、ヨコナダ	直縫から底部にかけ ての小片	直縫全体に根付石		

※決勝日の位置とは東京標準時を示す。

番号	種類	性状	法寸(cm)	形	土	成土	色	表面	裏面	底面	底面状況	備考
45-4	草生上品	葉 口径: 21.0(幅) 溝道: 18.0(幅)	1m倒伏の枝石の 枝多く含む	普通	内面: 黄色一色 背面: 単純化一深紅色 側面: 黄色一側面	内面: ヨコナダ、ケズリ 背面: 茶褐色 側面: 明暗合色	内面: ヨコナダ、ケズリ 背面: 茶褐色 側面: 暗色	内面: ヨコナダ、ハキメ、ヘラケズリ 背面: ヨコナダ、ナガ、ハケメ	口縁から底面にかけ ての小片	口縁から底面にかけ ての小片	口縁から底面にかけ ての小片	
45-5	草生上品	葉 口径: 13.0(幅) 溝道: 11.0(幅)	2.0m程度の長石 を含む	普通	内面: 淡褐色 背面: 茶褐色 側面: 暗色	内面: 淡褐色 背面: 茶褐色 側面: 暗色	内面: 淡褐色 背面: 茶褐色 側面: 暗色	内面: ヨコナダ、ハキメ、ヘラケズリ 背面: ヨコナダ、ナガ、ハケメ	口縁から底面にかけ ての小片	口縁から底面にかけ ての小片	口縁から底面にかけ ての小片	
45-6	草生土器	葉 口径: 20.0(幅) 溝道: 15.0(幅)	1.0m倒伏の枝石の 枝多く含む	普通	内面: 淡褐色土 背面: 施色一端部(深色) 側面: 暗色	内面: 淡褐色土 背面: 施色一端部(深色) 側面: 暗色	内面: 淡褐色土 背面: 施色一端部(深色) 側面: 暗色	内面: ヨコナダ、ヨウジ 背面: ヨコナダ、ナガ	11cmから頂部にかけ ての小片	口縁部の小片	口縁部に煤付有	
45-7	草生上器	葉 口径: 19.0(幅) 溝道: 16.0(幅)	1.0m倒伏の枝石の 枝多く含む	普通	内面: 利用色土 背面: 淡褐色土 側面: 淡褐色、火色、黑色	内面: 利用色土 背面: 淡褐色土 側面: 淡褐色	内面: 利用色土 背面: 淡褐色土 側面: 淡褐色	内面: 利用化 背面: ヨコナダ、利化 側面: 利化	口縁部の小片	口縁部の小片	口縁部に煤付有	
45-8	草生上品	(底部) 底径: 8.6(幅) 溝道: 7.5(幅)	1.5m以下の砂粒 を含む	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 利化 背面: ヨコナダ 側面: 利化	底面は利化	底面は利化	底面は利化	
46-1	草生土器	葉 口径: 15.0(幅) 溝道: 14.0(幅)	石灰岩、長石粒を 含む	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨコナダ 背面: 利化 側面: ヨコナダ	円筒部が約1/6周			
47-1	草生土器	葉 口径: 15.0(幅)	1.0m以上の砂粒を 含む	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ	口縁部の小片			
47-3	草生上器	(底部) 底径: 8.8(幅)	1.5mの砂粒を含む	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 利用色土	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 利用色土	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 利用色土	内面: 利化 背面: 利化	底面は変形		二次的に火を受けている	
47-4	草生土器	(底部) 底径: 7.9(幅)	1.0m程度の砂粒を 含む	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 利用色土	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 利用色土	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 利用色土	内面: 利化 背面: 利化	底面はほぼ完形			
47-5	草生上器	(底部) 底径: 7.8(幅)	7m以上の石炭、 石灰、鐵の漂浮 を含む	普通	内面: 淡褐色 背面: 黒色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 黒色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 黒色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	小片(3×2.5cm)	外湯底部に保 持材		
47-6	草生上器	(底部) 底径: 4.8(幅)	1.0m程度の砂粒を 含む	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 利用色土	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 利用色土	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 利用色土	内面: 利化 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	底面約1/4	全体は二次的 な火を受けてい る		
47-7	草生土器	(底部) 底径: 7.7(幅)	3m以下の砂粒を 含む	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	底面の約1/5	外湯に火を受 けている		
48-1	土器	葉 口径: 8.3(幅) 底径: 8.0(幅)	1.0mの砂粒を含む	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	約1/4			
50-1	土器	葉 口径: 6.1(幅)	底径: 5.5(幅)	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	約1/2 (4×3.5cm)			
50-2	土器	葉 口径: 5.1(幅)	底径: 4.5(幅)	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	約1/2 (4×3.5cm)			
50-3	土器	葉 口径: 4.1(幅)	底径: 3.5(幅)	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	約1/2 (4×3.5cm)			
50-4	土器	葉 口径: 3.1(幅)	底径: 2.5(幅)	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	約1/2 (4×3.5cm)			
50-5	土器	葉 口径: 2.1(幅)	底径: 1.5(幅)	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	約1/2 (4×3.5cm)			
50-6	土器	葉 口径: 2.0(幅)	底径: 1.5(幅)	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	約1/2 (4×3.5cm)			
50-7	土器	葉 口径: 1.9(幅)	底径: 1.5(幅)	普通	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: 淡褐色 背面: 淡褐色 側面: 淡褐色	内面: ヨナダ 背面: ヨナダ 側面: ヨナダ	約1/2 (4×3.5cm)			
55-1	白器	輪花口 幅: 4.9(幅)	葉	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	底面の約1/2 (4×3.5cm)			
55-2	白器	葉 口径: 4.1(幅)	底径: 3.5(幅)	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	底面の約1/4 (3×3cm)			
55-3	白器	葉 口径: 3.1(幅)	底径: 2.5(幅)	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	底面の約1/4 (3×3cm)			
55-4	白器	葉 口径: 2.1(幅)	底径: 1.5(幅)	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	底面の約1/4 (3×3cm)			
55-5	白器	葉 口径: 1.9(幅)	底径: 1.5(幅)	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	底面の約1/4 (3×3cm)			
55-6	白器	葉 口径: 1.8(幅)	底径: 1.5(幅)	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	底面の約1/4 (3×3cm)			
55-7	白器	葉 口径: 1.7(幅)	底径: 1.5(幅)	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	底面の約1/4 (3×3cm)			
55-8	白器	輪花口 幅: 4.9(幅)	葉	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	底面の約1/2 (4×3.5cm)			
55-9	青花	葉 口径: 3.7(幅)	葉	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	中内側			
55-10	青花	葉 口径: 3.0(幅)	葉	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	中内側			
55-11	青花	葉 口径: 2.8(幅)	葉 底径: 2.3(幅)	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	中内側			
57-1	青生上器	葉 口径: 2.4(幅)	葉	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: ヨコナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	2.4cm			
57-2	青文上器	葉 口径: 2.0(幅)	葉	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 固結ナダ 背面: ヨコナダ 側面: ヨコナダ	1.0/2			
57-3	青文上器	(底部) 底径: 10.0(幅)	葉 底径: 8.5(幅)	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 固結ナダ 背面: 黑色 側面: 黑色	底面のみ完形			
57-4	青生土器	(底部) 底径: 6.2(幅)	葉 底径: 5.7(幅)	良好	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 黑色 背面: 黑色 側面: 黑色	内面: 固結ナダ 背面: 黑色 側面: 黑色	底面の約2/5		二次的に火を受けている	

※記載項の(無)とは既述該定を示す。

遺物観察表(石器)

標記	種類	寸法		重さ(g)	石材	例	考
		長さ	幅				
7-4 石斧		7.2	4.8	2.0	71.18 サスカイト?	刀部を欠損	
26-1 石斧		1.7	1.5	0.3	0.58 安山岩系	先端を若干欠損するがほぼ完存	
36-2 小石核		3.1	3.6	1.9	21.23 黒曜石	風化が進んだ面が多く存在する遠隔石である。一方でだけに新しい新種類があるの でそこでも石核を採取したと思われる。	
26-3 石縫未製品?		(9.6)	4.2	1.8	45.94 ピンク系		
26-4 鎌石		12.3	10.45	5.55	1,080		
31-1 砕石		15.1	7.4	6.1	882		
35-1 砕石		7.3	7.2	5.0	349.44		
35-2 石皿		18.1	9.5	5.8	1,525		
36-3 石皿		15.3	11.0	3.0	1,681		
38-1 石斧		2.5	1.3	0.4	1.01	刃部の要を欠損している	
38-2 石斧		(6.8)	4.0	2.2	86.93 サスカイト	基部を欠損	
38-3 スクレーパー		(2.6)	(6.0)	1.0	(32.40)	斜めに大きく削れています	
46-1 鋸刃石器		13.7	5.7	4.6	402.22		
46-2 砕石		9.6	8.9	2.3	162.19		
48-1 銀石?		9.6	7.8	4.1	501.79		
48-2 鎌石		8.5	7.8	3.7	300.96		
50-1 石斧		1.5	1.3	0.5	0.73 安山岩系	完形	
50-2 刃		1.5	3.6	0.7	2.82 黒曜石		
50-3 力石		8.2	4.6	3.0	145.23	完形	
50-4 鎌石		11.0	8.4	5.1	650		
50-5 石鍬		10.4	8.0	1.7	169.25	完形	
53-6 万能		6.4	6.8	2.0	111.59		
51-1 鎌石		12.0	10.3	5.2	953		
51-2 石皿		22.8	19.6	7.6	5,220	完形	
52-1 鎌石		14.0	11.2	3.2	1,090		

図版





運河佐陀川（左）と大勝間山城跡調査前風景（南より）



調査前近景（北より）



竪穴住居跡 SI01 積設定状況（南より）



竪穴住居跡 SI01 の炭と焼土（西より）



竪穴住居跡 SI01 完掘状況（南西より）



竪穴住居跡 SI01 と溝 SD01 完掘状況（北東より）



竪穴住居跡SI01の中央ピット（南より）



竪穴住居跡SI01のピットP-2 土層断面



溝SD01内遺物出土状況（東より）



B区完掘状況（北東より）

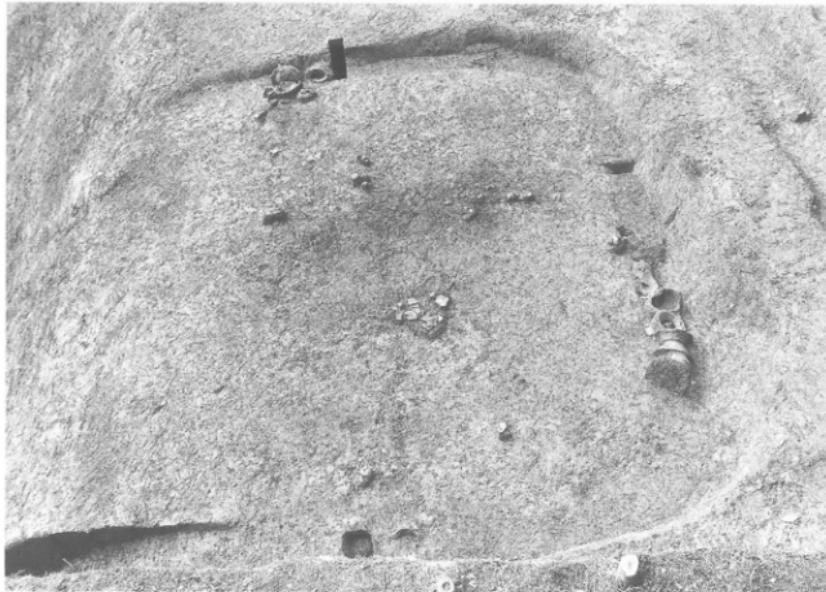
図版 6



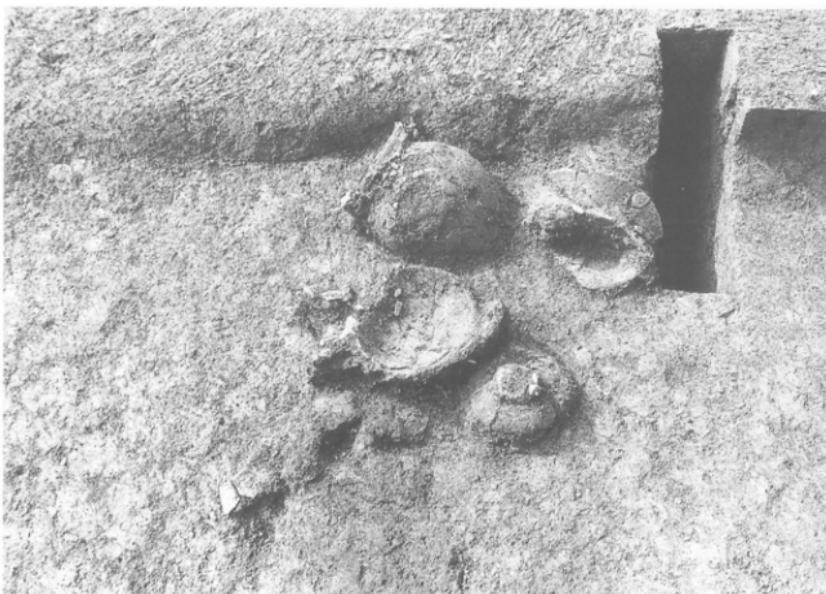
C区平面プラン検出状況（西より）



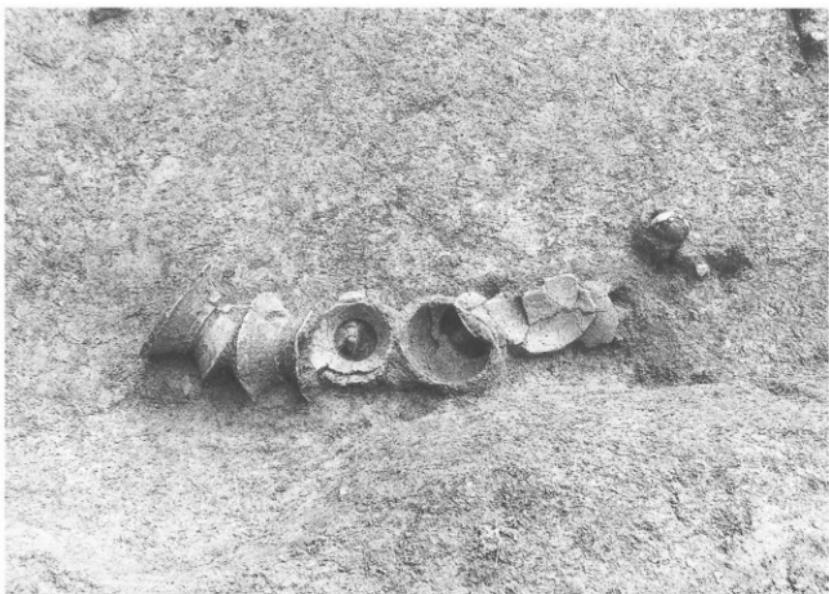
竪穴住居跡 SI02 穴設定状況（西より）



竪穴住居跡 SI02 遺物出土状況（東より）



竪穴住居跡 SI02 西壁付近遺物出土状況（東より）



竪穴住居跡 SI02 北壁付近遺物出土状況（北より）



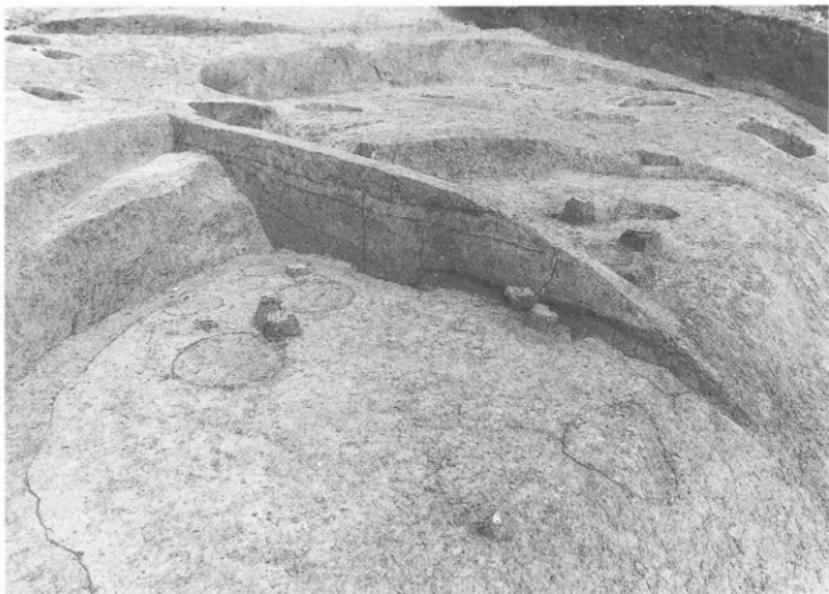
竪穴住居跡 SI02 遺物出土状況（北壁付近拡大）



竪穴住居跡SI02平面プラン検出状況（北東より）



竪穴住居跡SI02完掘状況（東より）



竪穴住居跡SI03と04の鞋セクション（南西より）



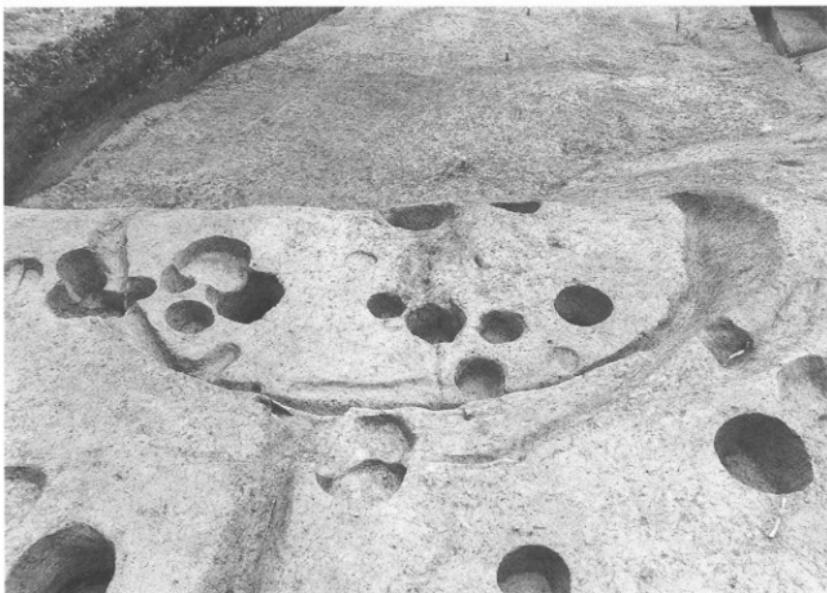
竪穴住居跡SI04平面プラン検出状況（西より）



竪穴住居跡 SI04 中央ピット内敲石出土状況（西より）



竪穴住居跡 SI04 完掘状況（東より）



竪穴住居跡SI04完掘状況（北より）



竪穴住居跡SI02、03、04完掘状況（東より）